新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第31

関越自動車道

埋蔵文化財発掘調査報告書

瓜ヶ沢遺跡
滝沢の塚
七久保遺跡
苗場山城跡

1985

新潟県教育委員会

関越自動車道

埋蔵文化財発掘調査報告書

瓜ヶ沢遺跡
滝沢の塚
七久保遺跡
苗場山城跡

1985

新潟県教育委員会

序

「関越」・「北陸」両自動車道は，すでに一部が開通し，また「上越新幹線」も11月開業が決定し，新潟県内も高速交通化時代に入ったと云え，両自道車道の全線開通が期待されているところである。

本報告書は，関越自動車道建設に伴い日本道路公団の委託を受け，昭和55年・56年度にわたって新潟県教育委員会が調査主体となって実施した瓜ヶ沢遺跡・滝沢の塚・七久保遺跡・苗場山城跡の発掘調査記録である。

殊に瓜ヶ沢遺跡では先土器時代・縄文時代の遺物・遺構が確認され，また滝沢の塚は近世の土壇跡であることが判明し，貴重な成果をおさめることができた。本調査の成果が今後の研究の一助となれば幸いである。

最後に，本調査に参加された調査員をはじめ，多大な御協力・御援助をいただいた堀之内町教育委員会・大和町教育委員会・作業に従事された地元有志の方々，また計画・調査実施にわたり種々の御配慮をいただいた日本道路公団新潟建設局・同小出工事事務所の各位に対し，ここに深く謝意を表する次第である。

昭和60年３月

新潟県教育委員会

教育長　久　間　健　二

例　　言

1. 本報告書は関越自動車道建設に係る埋蔵文化財包蔵地のうち，昭和55年・56年度に日本道路公団から新潟県が委託を受け，県教育委員会が発掘調査を実施した四遺跡の発掘調査記録である。
2. 本報告書で掲載したものは，瓜ヶ沢遺跡（北魚沼郡堀之内町根小屋字瓜ヶ沢）・滝沢の塚（〃）・七久保遺跡（南魚沼郡大和町大崎字七久保）・苗場山城跡（南魚沼郡大和町大崎字堂平）であり，この順序で掲載した。
3. 発掘・整理等一連の作業は県教育庁文化行政課埋蔵文化財係職員が行った。
4. 発掘調査によって得られた遺物は一括して県教育委員会が保管している。
5. 本報告書の執筆は瓜ヶ沢遺跡の第Ⅰ章を高橋保，第Ⅱ・Ⅲ章を佐藤雅一が，滝沢の塚は田辺早苗が，七久保遺跡は佐藤雅一が，また苗場山城跡は中島栄一がそれぞれ担当し，藤巻正信がこれを編集した。なお，本報告書は昭和56年度中に脱稿したものである。
6. 発掘調査の実施にあたり，参加者各位ならびに堀之内町・大和町から御支援と御協力を賜わった。また，日本道路公団新潟建設局からは種々の御協力をいただいた。記して感謝の意を表したい。
7. 発掘調査から本書の作成に至るまで，下記の諸氏から種々のご指導・ご助言を賜わった。記して感謝の意を表したい。（敬称略　五十音順）

池田　亨　伊藤正一　井上慶隆　大関正夫　大平昭二　小出高校歴史研究会　桜井準也
鈴木俊成　角屋久次　竹石健二　寺崎裕助　富樫雅彦　星野洋二　星野芳郎　宮　　温
八木次男　山中一郎　渡辺好夫

目　　次

瓜ヶ沢遺跡発掘調査報告書

Ⅰ　発掘調査に至る経過 ……1

Ⅱ　周辺の地形と遺跡 ……2

Ⅲ　瓜ヶ沢遺跡 ……4

1．調査概要 ……4
2．層　　序 ……6
3．遺　　構 ……7
4．出土遺物 ……13
5．ま と め ……19

滝沢の塚発掘調査報告書

1．調査概要 ……23
2．遺　　構 ……24
3．遺　　物 ……26
4．ま と め ……27

七久保遺跡発掘調査報告書

1．遺跡の所在地 ……31
2．調査に至る経緯 ……31
3．調査体制 ……32
4．調査の方法 ……32
5．調査の経過 ……32
6．遺　　物 ……34
7．ま と め ……36

苗場山城跡発掘調査報告書

Ⅰ　調査の経緯 ……37

Ⅱ　遺跡の環境 ……39

Ⅲ　調査の結果 ……42

挿　図　目　次

瓜ヶ沢遺跡

第１図　周辺の遺跡と地形 ……3
第２図　グリッド設定図 ……5
第３図　確認調査区域図 ……6
第４図　土層柱状図 ……6
第５図　遺構分布図 ……7
第６図　住居跡実測図 ……8
第７図　１号土壙実測図 ……9
第８図　２号土壙実測図 ……10
第９図　Ｖ字形溝状遺構実測図 ……11
第10図　柱穴群実測図 ……12
第11図　縄文時代資料 ……14
第12図　先土器時代資料Ⅰ ……16
第13図　先土器時代資料Ⅱ ……17

滝沢の塚

第14図　滝沢の塚周辺図 ……23
第15図　滝沢の塚現況図 ……24
第16図　滝沢の塚実測図 ……25
第17図　出土遺物 ……27

七久保遺跡

第18図　七久保遺跡と周辺の地形 ……31
第19図　グリッド設定及び発掘方法表示 ……33

第20図　基本土層柱状図 ……34
第21図　表面採集資料 ……35

苗場山城跡

第22図　遺跡位置図 ……38
第23図　遺跡周辺の地形図 ……40
第24図　苗場山城全測図 ……41
第25図　空濠(D)の平・断面図 ……42

図　版　目　次

瓜ヶ沢遺跡

図版１　遺跡遠景　遺跡近景
図版２　遺構完掘状況　先土器時代遺物包含層試掘状況
図版３　第１号住居跡完掘状況　第２号住居跡及び第２～４号Ｖ字形溝状遺構完掘状況
図版４　第３号住居跡完掘状況　第４号住居跡完掘状況
図版５　第１号土壙断面　第１号Ｖ字形溝状遺構断面
図版６　第２号土壙断面　第２号土壙土器出土状況
図版７　第２号Ｖ字形溝状遺構　第３号Ｖ字形溝状遺構
図版８　第４号Ｖ字形溝状遺構　第４号Ｖ字形溝状遺構
図版９　縄文時代資料（Ⅰ）
図版10　縄文時代資料（Ⅱ）
図版11　先土器時代資料

滝沢の塚

図版12　滝沢の塚遠景　西側盛土状況
図版13　東側土橋状張り出し部　完掘近景
図版14　完掘近景　出土遺物

七久保遺跡

図版15　遺跡遠景　遺跡近景

図版16　発掘スナップ　キャタピラ痕検出スナップ

図版17　表面採集資料

苗場山城跡

図版18　山城調査地点から北方を望む　苗場山城を望む

図版19　空濠全景　Ⅲの郭から調査地点を望む

図版20　空濠断面（発掘前）　空濠断面（発掘後）

瓜　ケ　沢　遺　跡

Ⅰ　発掘調査に至る経緯

昭和46年度に実施した北陸・関越自動車道にかかる分布調査で，小出・堀之内・川口地区担当の星野芳郎は，当遺跡を「寺村」遺跡として報告しており，縄文時代中期の遺跡で，石器・土器が表採できるとした。また昭和53年度に県教育委員会が実施した北魚沼郡遺跡詳細分布調査でも，数片の遺物が表採され，この時の調査で遺跡名は小字名をとって「瓜ヶ沢」に変更された。

昭和54年３月に日本道路公団から発掘調査工程表の提出とともに，権現平（本村），瓜ヶ沢（寺村）両遺跡の発掘調査を昭和55年６月にとの要望があり，また，同年10月の対公団との協議で，権現平遺跡は，昭和55年４月～６月に，瓜ヶ沢遺跡は，同年９月～11月に実施してほしい旨重ねて要請があった。引き続いて，同公団から昭和54年11月９日付け新建総総第867号で，昭和55年度埋蔵文化財の発掘調査依頼が提出された。

昭和55年に入り年間計画を立案したが，懸案の小千谷市城の腰遺跡の発掘調査を急ぐため，両遺跡とも10月からということで合意に達し，まず確認調査から実施することとなった。しかし，天候不順もあり，権現平遺跡の調査は終了したものの，瓜ヶ沢遺跡の調査は範囲確認にとどまり，本調査は来年度に持ち越しとなった。

昭和56年１月16日付け新建総総第25号で昭和56年度の埋蔵文化財発掘調査依頼があり，これを受けて，昭和56年４月10日に対公団との協議が行われ，雪解け後，早い段階での調査実施希望があり，昭和56年６月～７月に実施することとなった。

なお，55年度調査中に，両遺跡の間の細尾根に，濠らしいものが存在していたため，地形測量及び試掘調査を行ったが，その結果塚状遺構であることが判明し，調査の必要があるとの見解に至り，瓜ヶ沢遺跡と合わせて実施することとした。また，この塚は半分が法線外であったが，性格求明のために，土地所有者である渡辺好夫氏の承諾を得て，全掘調査することとした。調査体制は以下のとおりである。

第１次調査体制（昭和55年度）

調査主体	新潟県教育委員会（教育長	久間健二）
総　括	県教育庁文化行政課長	南　義昌
管　理	〃　課長補佐	石山欣弥
庶　務	〃　副参事	近藤信夫
〃	〃　主　事	獅子山隆
〃	〃　〃	伊藤和子
指　導	〃　埋蔵文化財係長	金子拓男
調査担当	〃　学芸員	斉藤基生
調査員	〃　〃	高橋　保
〃	〃　嘱　託	佐藤雅一
〃	県立六日町高等学校　教諭	池田　亨
〃	県文化財保護指導委員	滝沢健三郎
〃	小出町文化財室　嘱託	原喜久男

第２次調査体制（昭和56年度）

調査主体	新潟県教育委員会（教育長	久間健二）
総　括	県教育庁文化行政課長	南　義昌
管　理	〃　課長補佐	石山欣弥
庶　務	〃　副参事	近藤信夫
〃	〃　主　事	獅子山隆
〃	〃　〃	伊藤和子
指　導	〃　埋蔵文化財係長	金子拓男
調査担当	〃　学芸員	高橋　保
調査員	〃　臨時的任用職員	田辺早苗
調査員	〃　嘱　託	坂井秀弥
〃	〃　〃	佐藤雅一
〃	県文化財保護指導委員	滝沢健三郎
〃	小出町文化財室　嘱託	原喜久男

Ⅱ　周辺の地形と遺跡

瓜ヶ沢遺跡は，北魚沼郡堀之内町大字根小屋字瓜ヶ沢3051番地他に所在する（第1図）。堀之内町は新潟県の南部に位置し，切り花の生産地として知られている。市街地は，魚沼丘陵を南北に切る魚野川の左岸に発達している。町周辺の地形を概観すると，北側には魚沼丘陵の東麓をなす広神丘陵が存在し，ところどころに浸食の進んだ根小屋・小平尾台地などの段丘面が破間（アブルマ）川に面している。南西側は，高山（482.7m）を主峰とする南部魚沼丘陵内を北流する田河川沿いに数段の段丘が発達している。市街地の東側と南方には，破間川，魚野川を挟んで唐松山，その南に続く権現堂山地と，その背後の駒ヶ岳，巻機山，谷川連峰などが一続きの山脈を構成している。

破間川と魚野川は，前述した山脈の山麓沿いを北と南から直線的に流れ，堀之内町東隣の小出町で東から流れてくる羽根川，佐梨川と合流し，西へ大きく向きを変え魚沼丘陵を切って川口町で信濃川に合流している。魚野川は，谷川連峰を水源とし大源太川，三国（サグリ）川などの支流を集めて北流するが，六日町盆地の八色原扇状地に代表される数多くの扇状地が両岸に発達している。破間川は，守門岳，浅草岳の古い火山の間に源をもち，右岸に小規模な段丘を構成して南流している。

遺跡は広神丘陵の南端に位置し，魚野川に面した小規模な段丘上に立地している。段丘はGTV面（鈴木　1977），舟岡山面（新潟平野団体研究グループ　1967）と対比され，南西へ舌状に張り出している。魚野川からの比高は約55mで，背後の丘陵とは急斜面をもって境されている。段丘の東西両側には小規模な沢が入り込み，最奥部には湧水が存在する。

本地域には，数多くの遺跡が分布し，戦前から調査（斉藤　1973）が行われている。戦後には，月岡遺跡（中村他　1975），上の原遺跡（池田　1979），原・居平遺跡（池田　1981）等の発掘調査及び分布調査（星野他　1968・1969）がある。

第1図の2は縄文中期前半の好資料が出土している清水上遺跡（註），7は阿玉台・勝板式等の搬入土器及び磨製石鏃が出土している長者林遺跡である。11は，旧石器時代第Ⅲ文化期の細石刃・細石刃核の出土で有名な月岡遺跡（中村他　1975）であるが，縄文中期の卵形の住居跡に伴って，火焔様式の土器が出土している。10は中期後半が主体を占めている居平遺跡で，埋甕の好資料を得ている。14は搬入品と考えられる勝板式の資料を出土している柳平遺跡である。以上が代表的な遺跡である。これらの遺跡の周辺にも数多くの遺跡が分布しており，特に広大な田河川台地に数多くの遺跡が集中していることが注目される。

（註）　県教育委員会により，1981年に発掘調査が実施された。

1．瓜ケ沢遺跡　2．清水上遺跡　3．南谷地遺跡　4．吉田A遺跡　5．桜田遺跡
6．滝ノ沢の塚遺跡　7．荒屋敷遺跡　8．長者林遺跡　9．カジヤ原遺跡　10．ソック沢平遺跡　11．居平遺跡
12．月岡遺跡　13．正安寺遺跡　14．和田遺跡　15．柳平遺跡　16．稲荷平遺跡

第1図　周辺の遺跡と地形

（国土地理院発行 昭和48年「小千谷」昭和47年「須原」1:50,000原図）

Ⅲ 瓜ヶ沢遺跡

1. 調査概要

A 調査方法

1　発掘調査対象範囲は，昭和55年度の第1次調査結果をもとに決定した。範囲は，Eラインより先端部とし，それより山側は，状況により重機による遺構確認を行うこととした。

2　グリッドの設定は，日本道路公団測量の中心杭（STANO. 60+60）を原点とし，それと他の中心杭（STANO. 60+40）の2点間を通す直線と，これに直交する直線を座標軸とした。

3　座標軸をもとに，10mを大グリッドとし，北から南へA～K，東から西へ1～9の記号を付し，この10×10mグリッドをさらに2×2mに25等分し，北西隅から南東隅へ1～25の番号を付し，小グリッドとした。グリッド表示は1－A(1)のようになる。

4　遺構が検出された場合，すべて大グリッド内で遺構別にまとめ，整理段階で遺構別に連続ナンバーを付した。

B 日誌抄

第1次発掘調査　昭和55年10月27日～11月22日

10月27日～29日　発掘調査開始。大グリッド毎に表面採集を実施した結果遺物なし。原則として大グリッド内の（5－10）（16・21）を2m×4mのちどり状に人力により試掘を行った。

11月4日～8日　遺跡全体の試掘は大半が終了した。その結果A～E区までは，全く遺物が出土しないことが判明した。その成果を踏まえて，3・4－E・Fと台地先端に拡張区を設定して試掘を行う。

11月17日～22日　3－G(9)を中心とする範囲に主柱穴6本が亀甲状に巡る住居跡が検出された。8－I(3)から楕円形土壙が検出され，縄文土器・石錐が出土した。

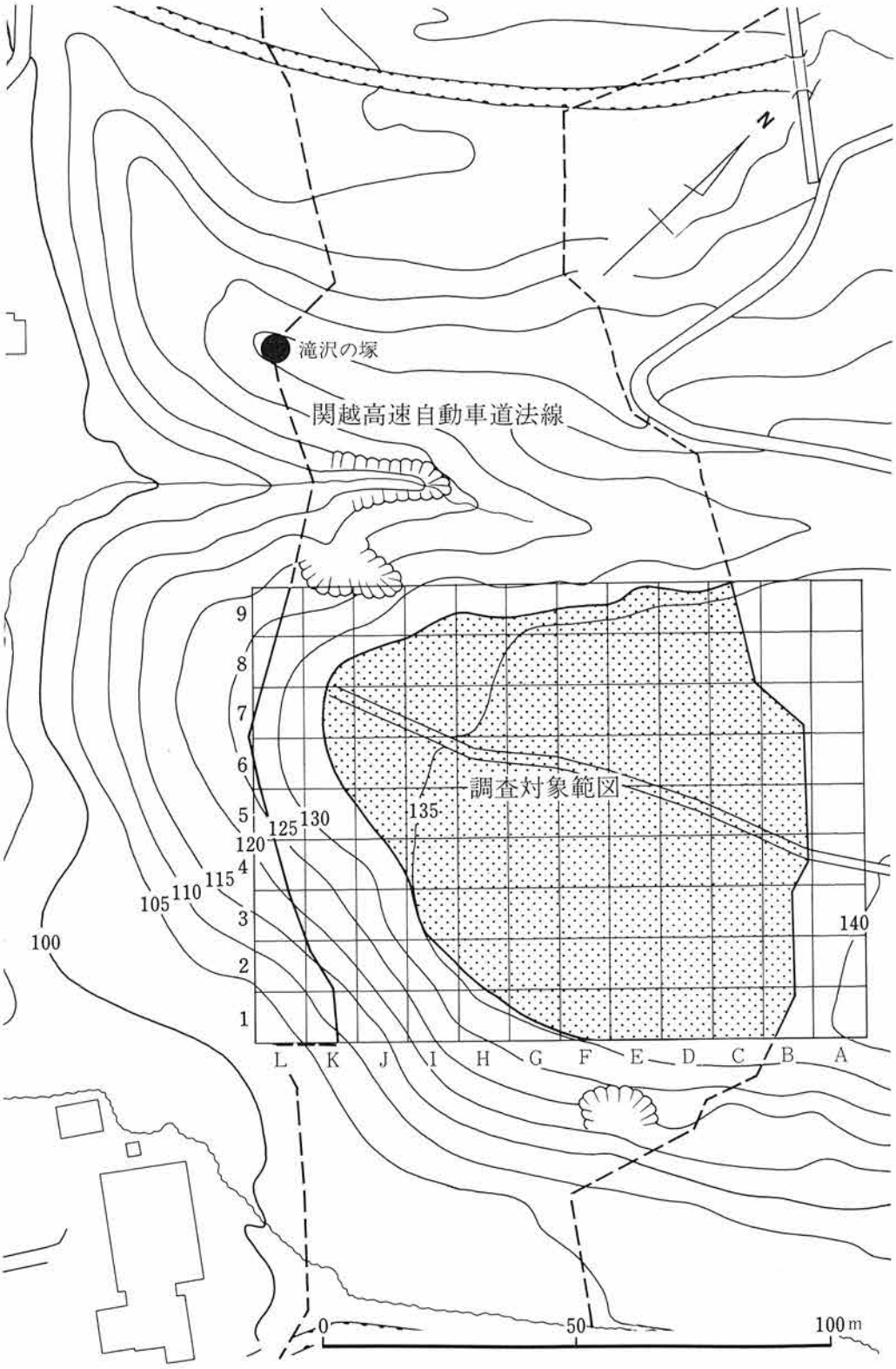
第1次調査の結果，発掘調査必要範囲は，Eライン以下であることが判明した。

第2次発掘調査　昭和56年6月8日～7月4日

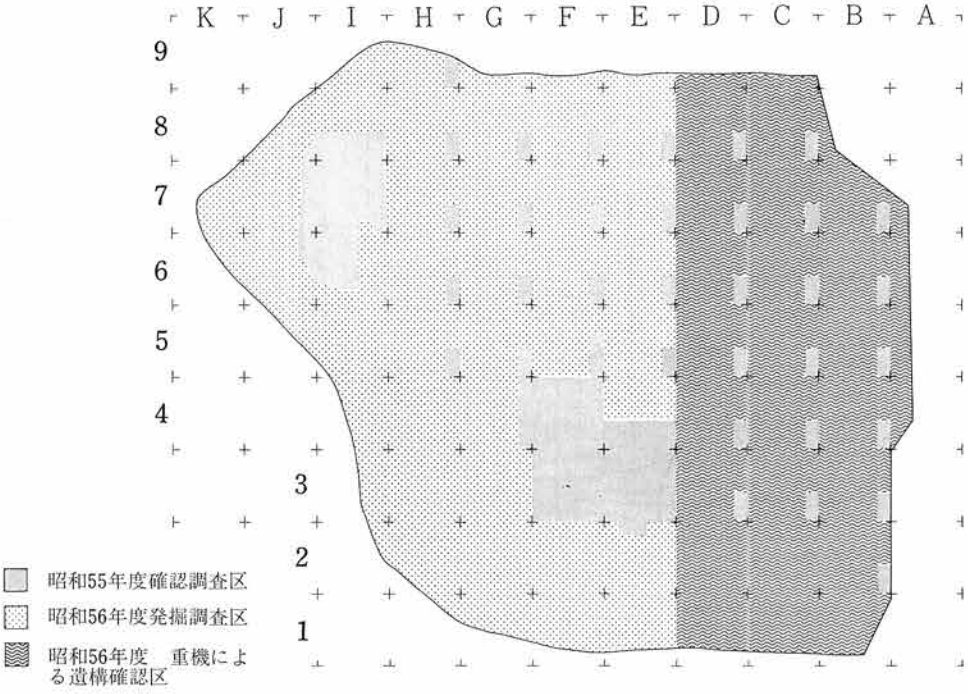
6月8日～13日　発掘調査開始。2－Fでチョッピングトゥールと礫を地山直上から検出。確認面を精査し，その他の遺物・炭化粒の検出につとめたが皆無であった。地山直上の礫集中部が礫群であるかどうか，サブトレンチを設定して下層との関係を調査した。その結果，礫は下層の段丘礫層と一連のものであり，従って，チョッピングトゥールは単独に出土したことが判明した。また4－G(17)からは径約1mの円形土壙が検出され，縄文時代中期前半の土器が出土した。先土器時代遺物包含層追求のため，Eライン以南の大グリッド内をちどり状（4m×4m）に試掘を行うことにした。

6月16日～19日　6・7－I・J付近から柱穴群を検出。5－Gから昨年検出された住居跡と同様の配列を示す柱穴が検出された。5・6－Gから断面がV字の溝状遺構が3基検出された。

6月22日～27日　7－H・Gでも配列が亀甲状を呈する柱穴が2グループ検出され，これらの台地先端に存在する4棟の住居跡には規格性があると判断した。7－GからV字形溝状遺構が1基検出され，これらV字形溝状遺構についても，ほとんど長軸方向が一定していることから，規格性のある一連の遺構と判断した。7－G(24)検出の耕作に伴う根切り溝中からナイフ形石器が出土した。その周辺付近でも


N
滝沢の塚
関越高速自動車道法線
調査対象範囲
9
8
7
6
5
4
3
2
1
L
K
J
I
H
G
F
E
D
C
B
A
100
105
110
115
120
125
130
135
140
0
50
100m

第2図　グリッド設定図



第3図　確認調査区域図

ナイフ形石器が表採された。そのため，周辺を精査し下部層への追求を開始した。

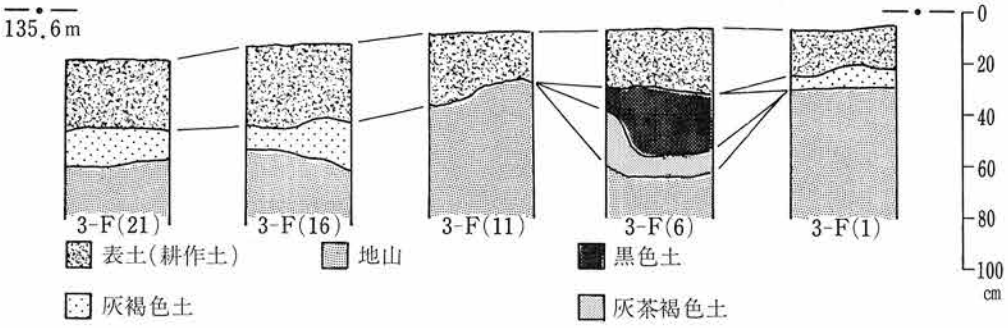
6月29日～7月4日　7－G周辺の下部層の発掘は，遺物及び炭化粒の検出が皆無であった。それまでに検出された遺構の実測・写真撮影を行い，発掘調査を完了した。

2. 層　　序（第4図）

層序は，4層に分帯でき，地表から地山まで30～40cmの層厚を測る。

1層　表土（耕作土）

2層　灰褐色土　黄白色粘質土ブロックを含有し，地山へ漸移的に変化していく。



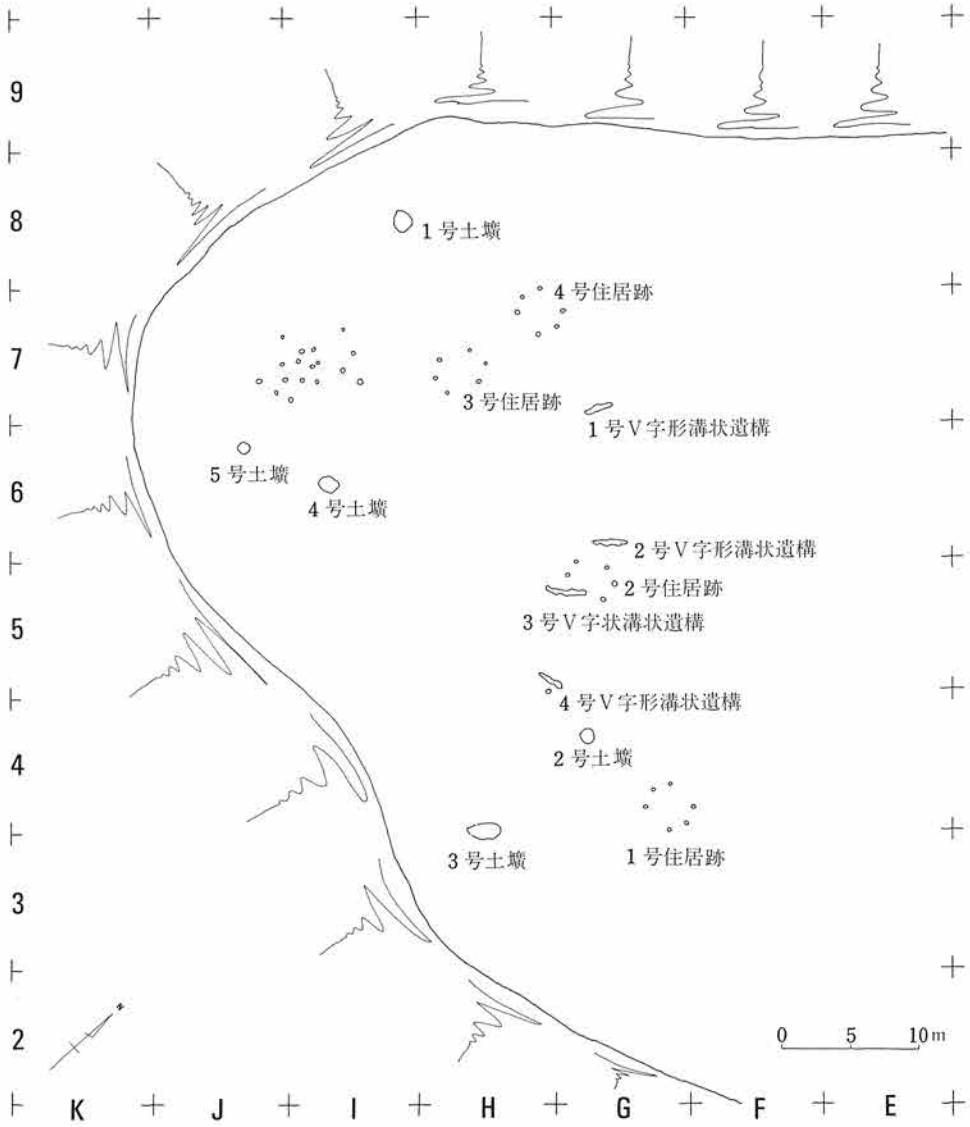
第4図　土 層 柱 状 図

3. 遺　　構

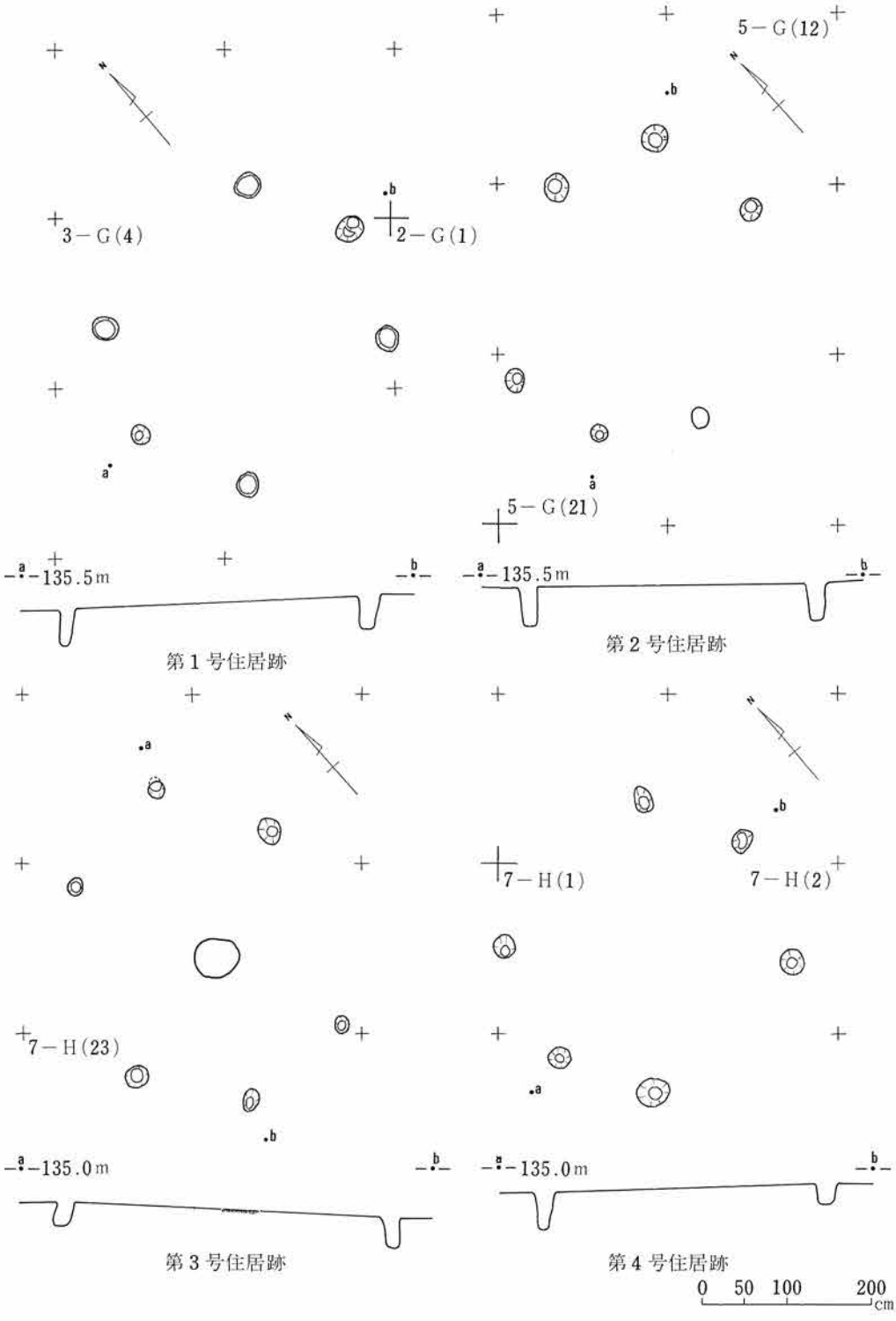
台地先端に住居跡４棟・土壙５基・Ｖ字形溝状遺構４基・柱穴群が確認された（第５図）。

A　住居跡（第６図，図版３・４）

住居跡は，柱穴の配列・柱穴内覆土・検出状況等に共通性が認められる。４棟はともに，６基の柱穴が亀甲状に巡り，このうち４基が方形を構成し，残る２基は向いあう２辺の外に対称的に存在する。この外側の２基を結ぶ線を住居の主軸と仮称する。これらの柱穴にはす



第５図　遺構分布図


3－G(4)
2－G(1)
5－G(12)
5－G(21)
a
b
135.5m
第1号住居跡
第2号住居跡
7－H(23)
7－H(1)
7－H(2)
135.0m
第3号住居跡
第4号住居跡
0 50 100 200
cm

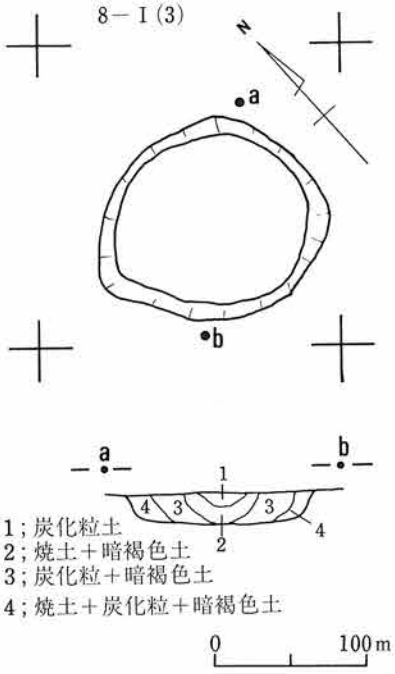
第6図　住居跡実測図

べて黒褐色土が流入していたが，住居跡の上には直接耕作土が堆積しており，壁も検出されなかった。床面は明らかでないが，第３号住居跡では炉跡と思われる焼土が確認されており，焼土面が床面であると考えるのが妥当と思われる。しかし，他の地山面と硬度において異るところはない。他の住居跡では床面を確認することはできず，耕作によって削平されたものと思われるが，ここでは便宜上，柱穴確認面を床面として説明を進める。

１号住居跡　３－Ｆ（24・25），３－Ｇ（４・５・９・10）に位置する。柱穴の配列のうち，住居の主軸は東西方向で約380㎝，方形の一辺は約260㎝を測る。柱穴は径22～23㎝，深さ約40㎝を測る。周溝・炉は確認できず，床面は西へ緩く傾いている。遺物は全く出土していない。

２号住居跡　５－Ｇ（11・12・16・17・21・22），６－Ｇ（15・20）に位置する。住居の主軸は北東－南西方向で約370㎝，方形の一辺は約260㎝を測る。柱穴は径22～32㎝，深さ約40㎝を測る。そのうち，南隅の柱穴は３号Ｖ字形溝状遺構と重複しているが，切り合い関係は不明である。周溝・炉は確認できず，床面はほぼ平坦である。出土遺物は皆無である。

３号住居跡　７－Ｈ（８・９・13～15・18～20）に位置する。住居の主軸はほぼ南北方向で約400㎝，方形の一辺は約255㎝を測る。柱穴は径22～32㎝，深さ28～38㎝を測る。周溝は確認できなかったが，床面中央部が加熱を受け赤褐色に変色し炭化粒が存在しているため，炉の可能性が強い。P_3 から縄文土器片・剝片（第11図５・10・11）が出土した。



第７図　１号土壙実測図

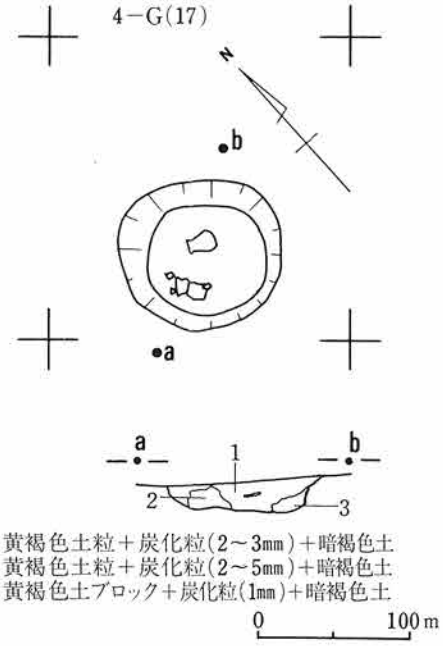
４号住居跡　７－Ｇ（21・22），７－Ｈ（１・２・６・７）に位置する。住居の主軸は東西方向で，約330㎝，方形の一辺は約270㎝を測る。柱穴は径30～40㎝，深さ13～20㎝を測る。周溝・炉は確認できず，床面はほぼ平坦である。遺物の出土は皆無である。

Ｂ　土　　壙（第７・８図，図版５・６）

１号土壙　８－Ⅰ(3)に位置する。形状は直径150㎝程の不整円形を呈し，遺構確認面からの深さは22㎝を測り，断面は皿状を示し，やや急傾斜に立ち上がる。壁・基底部は明瞭である。覆土は１～４層に区別でき，レンズ状を呈することから，自然堆積であると判断される。１層は炭化粒の単純層であるが，２～４層は暗褐色土を基本とし，焼土・炭化粒の含有量の多少によって細別したも

のである。3層から縄文土器・石錐（第11図3・7）が出土している。これらの遺物の特徴から，本土壙は縄文時代晩期に埋没したと考えられる。

2号土壙　4－G(17)に位置する。形状は直径100cm程の不整円形を呈し，遺構確認面からの深さは約18cmを測り，断面は皿状を示す。壁・基底部は明瞭であったが，基底部付近には凸凹が認められた。覆土は暗褐色土を基本として，黄褐色土粒・炭化粒の粒子の大小・含有量の多少によって1～3層に細別したものであり，基本的には同一層と考えられる。基底部直上（2層）と基底部上10cm（1層）から出土した土器は同一個体で，底部を除きほぼ完形であった（第11図）。この土器から，本土壙は縄文時代中期前半と判断される。



第8図　2号土壙実測図

3号土壙　3－H（11），4－H（15）に位置する。形状は楕円形を呈し，南東端は耕作に伴う根切溝でこわされていた。長径220cm（推定），短径110cm，深さ30cmを測る。遺物は出土していない。

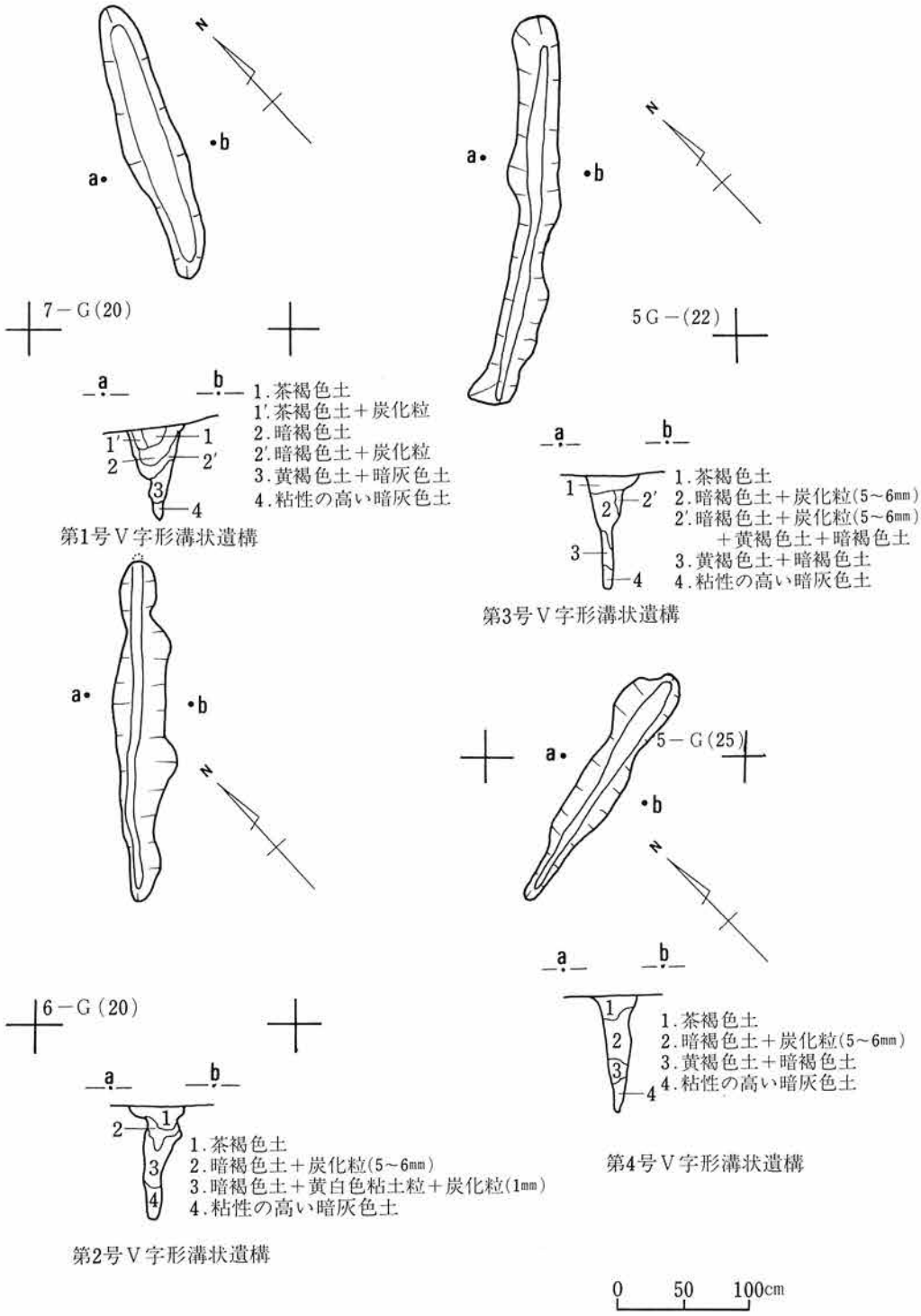
4号土壙　6－I（17・18）に位置する。形状は楕円形を呈し，長径80cm，短径70cm，深さ30cmを測る。遺物は出土していない。

5号土壙　6－J（6）に位置する。形状はほぼ円形を呈し，長径80cm，短径70cm，深さ20cmを測る。遺物は出土していない。

C　V字形溝状遺構(註)（第9図，図版5～9）

本遺構の形状は，平面形が溝状，短軸の断面がV字形を呈する。壁・基底部は明瞭で，ほぼ垂直に立ちあがる。覆土は基本的には四層に区別でき，レンズ状を呈することから自然堆積と判断される。1層は暗赤褐色土，2層は暗褐色土，3層は黄褐色土＋暗褐色土，4層は粘性の高い暗灰色土である。出土遺物は皆無であるため，帰属年代は不詳である。また長軸・

（註）　この遺構は，形状から「V字状溝状遺構」・「溝状土壙」と呼称されていたが，近年これらの検討が行われ，機能的性格を表わした「T（トラップ）ピット」・「陥し穴状遺構」という名称が使われるようになった。しかし，本県には類例が少ないため，積極的に機能的性格を表わした名称を使わずに，形状にそった『V字形溝状遺構』の名称を使った。



第９図　Ｖ字形溝状遺構実測図

短軸の測定は，開口部と底部の２ヶ所を測定し，底部の計測値は（　）内に表示した。

１号Ｖ字形溝状遺構　７－Ｇ（15・20）に位置する。長軸214（188）cm，短軸48（24）cm，遺構確認面からの深さは70cmを測る。長軸は，Ｎ－28°－Ｅの方位を示し，台地斜面にほぼ平行する。

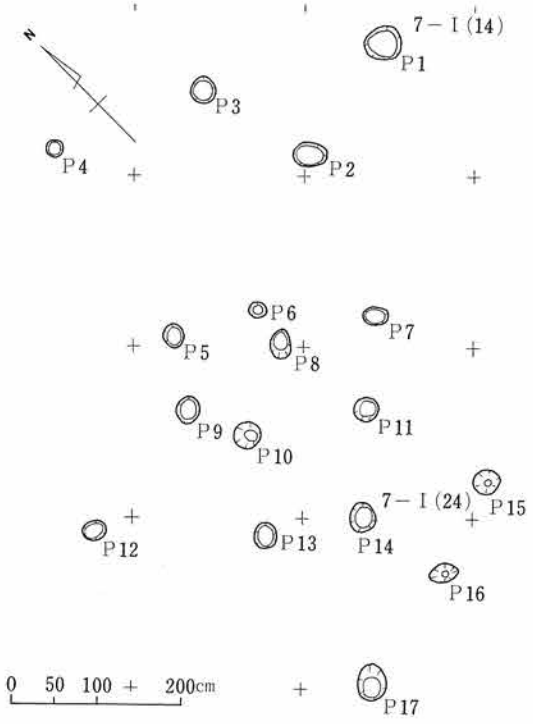
２号Ｖ字形溝状遺構　６－Ｇ（15・20）に位置する。長軸260（254）cm，短軸40（10）cm，遺構確認面からの深さは88cmを測る。長軸基底部の北東側が抉りこまれており，袋状を呈する。長軸はＮ－45°－Ｅの方位を示し，台地斜面にほぼ平行する。

３号Ｖ字形溝状遺構　５－Ｇ（17・22），５－Ｈ（２）に位置する。長軸298（260）cm，短軸26（12）cm，遺構確認面からの深さは88cmを測る。上面プランはやや不整形であるが，崩壊によるものと考えられる。長軸はＮ－50°－Ｅの方位を示し，台地斜面にほぼ平行する。２号住居跡と重複しているが，切り合い関係は不明である。

４号Ｖ字形溝状遺構　５－Ｇ（25），５－Ｈ（５）に位置する。長軸204（188）cm，短軸34（６）cm，遺構確認面からの深さは90cmを測る。長軸はＮ－78°－Ｅの方位を示し，台地斜面にほぼ平行する。

Ｄ　柱穴集中ブロック（第10図）

７－Ｉ（11～25）・７－Ｊ（１～５）に，17基のピットが集中して存在する。ほとんどの覆土は黒色土であり，１～４号住居跡柱穴の覆土に近似することから柱穴と考えられる。ピット14の基底部からは径20cmほどの偏平円礫が柱穴壁に立てかけられたような状態で検出されている。ほかに同様の柱穴は発見されなかった。検出された17基の柱穴の配列について現地及び机上で検討を重ねたが，関連性をつかむことはできなかった。



第10図　柱穴群実測図

4. 出土遺物

A 縄文時代（第11図，図版10・11）

1は2号土壙から出土した深鉢である。器形は口唇部が内傾し，口縁部は内彎する平口縁である。頸部はくびれており，胴部は緩やかに張り出している。口径15.5cm，頸部径13.4cm，胴部最大径16.7cmを測り，現高21cmで底部を欠失している。胎土に0.2～0.4cm前後の小礫を混入する。焼成は良く，色調は淡黄褐色を基調とし，部分的に黒斑や二次焼成による赤変を認めることができる。部分的ではあるが口縁部・胴部に炭化物が付着している。

文様は，口縁部文様帯と胴部分様帯に分かれ，さらにそれぞれ上部と下部に分かれる。口縁部文様帯の上部は4単位の構成で，口縁から垂下する逆曲玉状突起と横位の半截竹管文で区画される。その帯状の区画内は，基本的には上部に三角形沈刻文を施しており，部分的には上・下部両方に沈刻して，山形状あるいは亀甲状を呈している。亀甲状を呈する部分の中央には，円形の刺突が施されている。下部は研磨され，無文帯となっている。胴部文様帯の上部も，基本的には口縁部文様帯上部の文様と同一であるが，縦位区画はなされず，横位に一周する。胴下部にはRLRの縄文を施している。

また，その整形及び施文の方法と順序は，以下のように認められる。

口縁部文様帯

1 突起貼り付け。
2 突起に沿って左側から渦巻状に半截竹管文を施文。
3 口縁直下及び下位の2本1組の半截竹管文を左から右へ横引き（突起間で終始）。
4 区画内に2本1組（幅0.18cm程）の櫛歯状施文具による沈線を縦方向に施文。
5 区画内に三角形沈刻文及び亀甲状の中央に直径0.2cmの棒状施文具による刺突文施文。

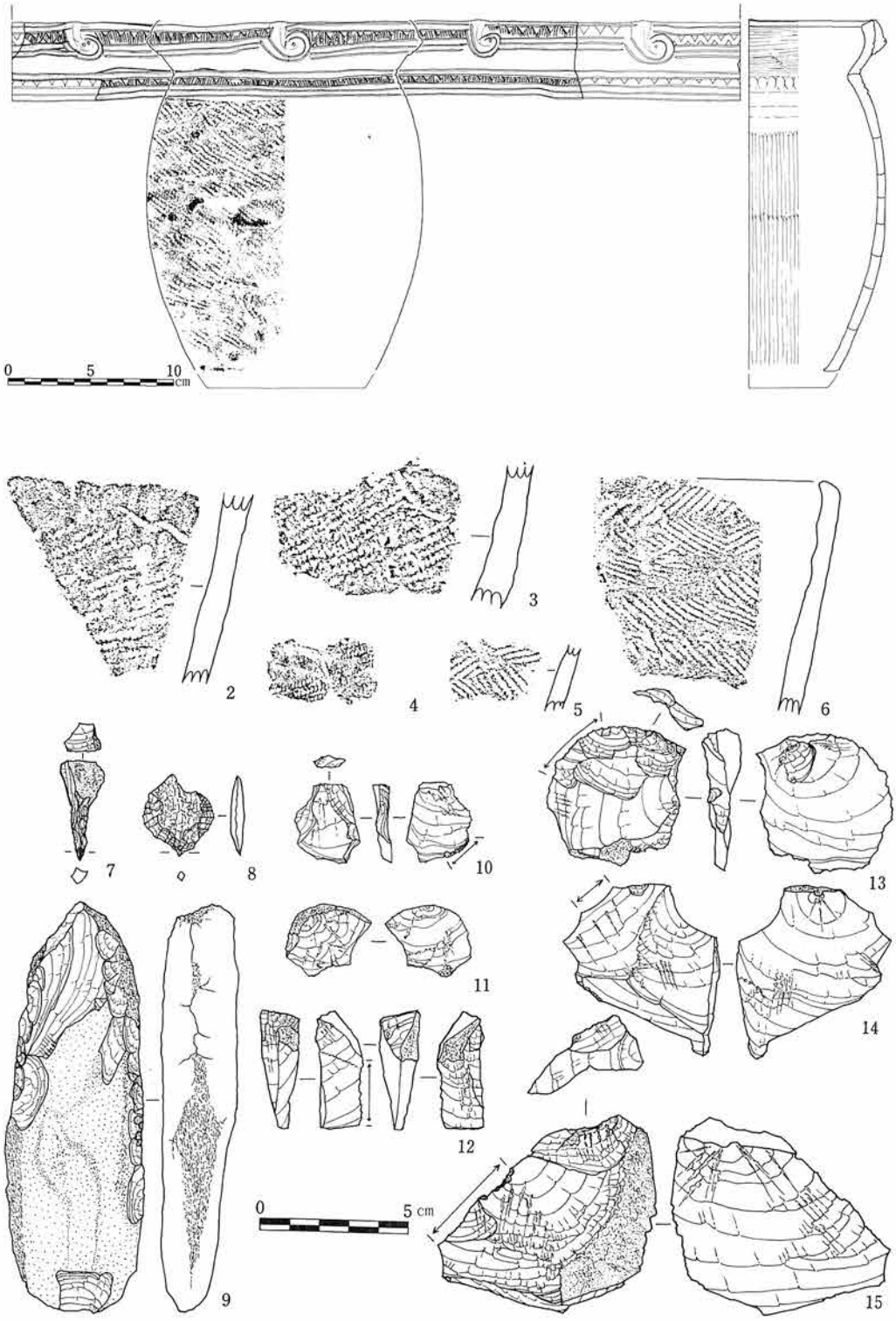
胴部文様帯

1 縄文RLRを横位に施文。
2 上下3本の半截竹管文を左から右へ横引き。
3 区画内に2本1組（幅0.18cm程）の櫛歯状施文具による沈線を縦方向に施文。
4 区画内に三角形沈刻文を施文。

図版11の突起接合面の観察から，これらの文様施文以前に文様構成の割り付けがなされていたことがうかがえる。

内面は箆状工具によって，口縁部・胴部上半は横方向に，胴部下半は縦方向に幅0.2cm程で磨かれている。特に胴部上半は丁寧に行われている。また，頸部には長軸0.7cm，短軸0.5cm程の指頭によると考えられる圧痕がある。

2・3は1号土壙出土で深鉢形土器の同一個体胴部破片である。胎土に0.2～0.7cmの小礫を多く混入し，焼成は良く，色調は淡黄色を基調とする。外面はLRの縄文が施文され，一部にあやくり文が認められる。内面は箆状工具によって幅0.7cm程で縦方向に調整されてい



第11図　縄文時代資料

る。

4は3号住居跡ピット3出土で深鉢形土器の破片である。胎土に0.1cm程の白色砂粒を含み，焼成は良く，色調は暗褐色を基調とする。外面はLRの縄文を施文し，内面は篦状工具によって縦方向に調整されている。

5は4－F（6）出土で深鉢形土器の胴部破片である。胎土に0.1cm程の白色砂粒を含み，焼成は良く，色調は灰褐色を基調としている，外面はRLの縄文を縦・横方向に転がして羽状文的に施文している。内面は横方向の擦痕が認められる。

6は3－F出土で深鉢形土器の口縁部破片である。胎土に0.1～0.2cm程度の細砂粒を含み，焼成は良く，色調は赤褐色を基調とする。口縁は平縁である。外面にはRLの縄文を縦・横に転がして羽状文的に施文している。内面はかすかに横方向の擦痕が認められる。

7は1号土壙出土の石錐である。長さ3.3cm，最大幅1.5cmを測る。チャートを原材とするが，素材の詳細は不明である。正面に原面を多く残し先端部のみを意図的に細長く加工している。

8は8－H（23）から出土した石錐である。長さ2.9cm，最大幅2.4cmを測る。玉髄を原材とし，不定形剥片を素材として破片の一端に細部調整剥離を施している。

9は6－G（12）からの出土で打製石斧もしくは叩き石と考えられるものである。長さ13.7cm，基部幅4.5cm，厚さ2.5cmを測る。粘板岩を原材とし，素材は扁平礫を使用している。調整加工は側縁から基部にかけて，大振りな加工とともにつぶれを認めることができる。

10・11は3号住居跡ピット3からの出土で，チャートの同一母岩剥片である。10は剥離面打面から剥離された剥片で，長さ2.7cm，最大幅2.1cmを測る。右側縁に折損面があり，左側縁にリタッチが認められる。11は長さ2.5cm，最大幅3.0cmを測り，原面打面を有する。

12は7－I（9）出土の剥片で，長さ4.0cm，最大幅1.4cmを測る。剥離面打面を有し，主剥離面がその打面からのフルーティング状の剥離によって切られている。正面右側縁にリタッチが認められる。

13は7－H（17）出土の剥片であり，長さ4.7cm，最大幅4.6cmを測り，頁岩を原材とする。剥離面打面を有し，打面の90度転置を認める資料である。左肩部にリタッチが認められる。

14は7－G（3）出土の剥片で，長さ5.8cm，最大幅5.8cmを測り，頁岩を原材とする。原面打面を有し，左肩部にリタッチが認められる。

15は3－F出土の剥片で，長さ6.6cm，最大幅7.2cmの横長剥片である。流紋岩を原材として，剥離面打面から製作されたものである。正面右側縁には多くの原面を有し，左側縁にはリタッチを認めることができる。

B　先土器時代（第12・13図，図版12・13）

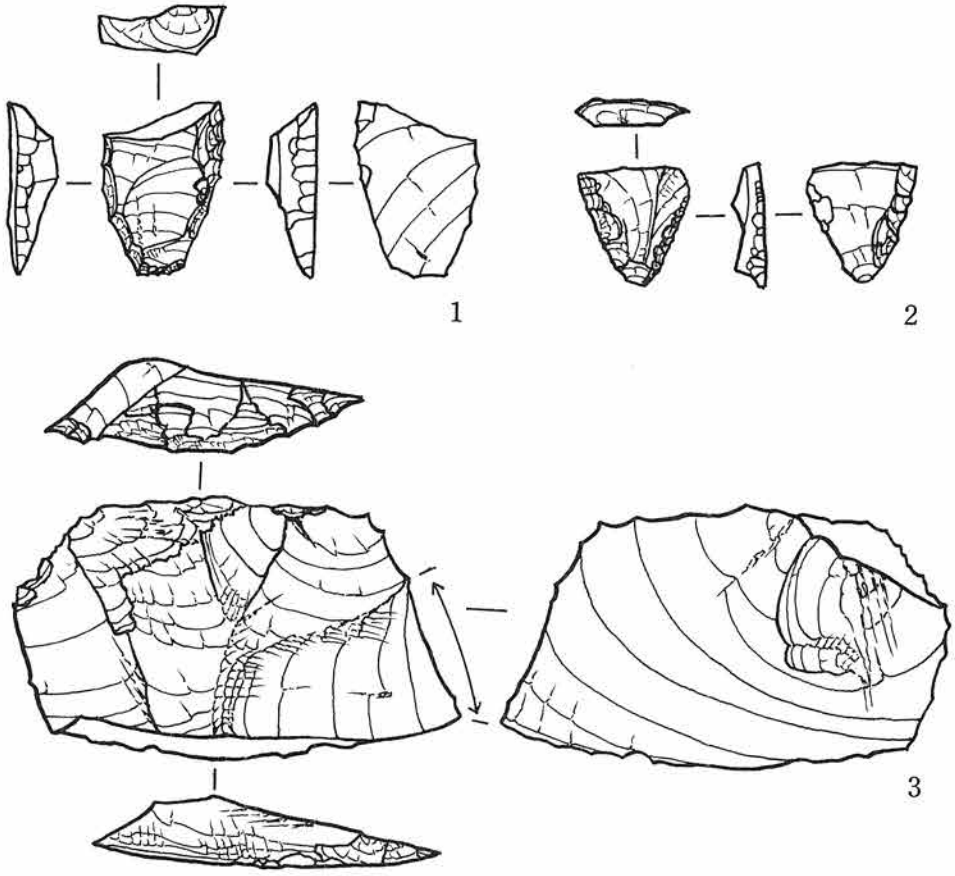
1は頁岩製のナイフ形石器の基部破片で，現存長2.3cm，最大幅1.6cm，厚さ0.7cmを測る。

石器主軸が一致せず，約55度ずれている。裏面と表面の一次剥離面を観察すると，素材は基本として石器基部方向からの剥片剥離によっている。しかし，表面右側縁に約90度剥離方向の異なる剥離面がある。両側縁は極厚形細部調整(註1)を施し，形を整えるとともに打面除去を行っている。基部は薄形細部調整(註2)によって平担になっている。

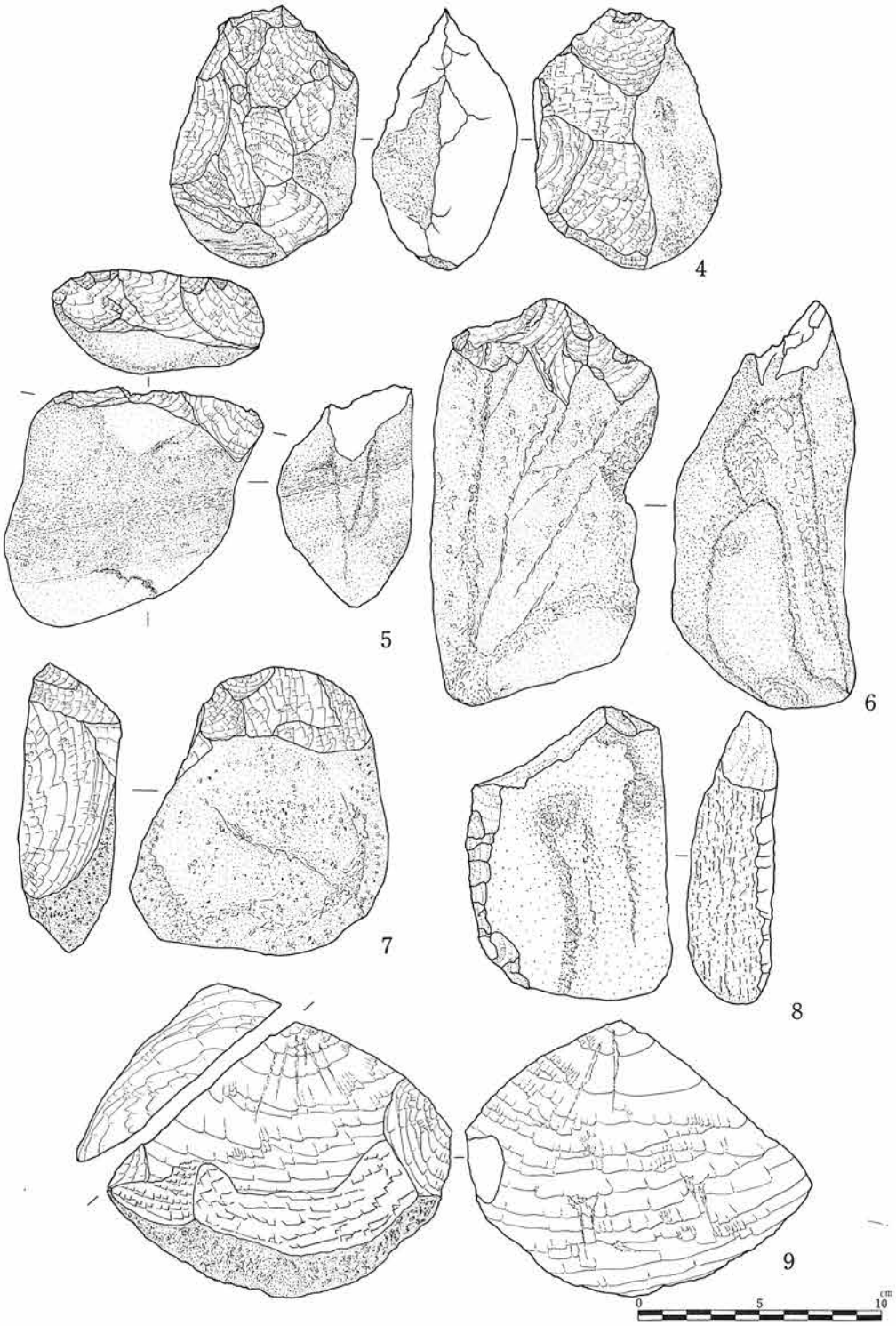
2は頁岩製のナイフ形石器の基部破片で，現存長1.6cm，最大幅1.5cm，厚さ0.5cmを測る。石器主軸と素材主軸はほぼ一致しており，石器主軸に対して表面の剥離方向がほぼ直交する剥離が行われている。表面両側縁は極厚形細部調整を施し，尖頭形の基部に形を整えるとともに打面除去を行っている。裏面右側縁は，薄形細部調整が施されている。

（註1）　70度以上の打撃角を示す細部調整であり，背部整形を目的とする刃つぶし，器形整形を目的とする切りとりなどに利用される（赤澤威　小田静夫　山中一郎　1980）。

（註2）　25度から55度の打撃角を示す細部調整である（赤澤威　小田静夫　山中一郎　1980）。



第12図　先土器時代資料（Ⅰ）　（S＝1/1）



第13図　先土器時代資料（Ⅱ）

3は頁岩製の剝片で，現存長3.5cm，最大幅6.0cm，厚さ0.9cmを測る。多面調整打面(註3)から剝ぎ出されており，表面剝離面には剝離方向が直交する面が存在する。

4は凝灰岩製のチョッピングトゥールである。最大長10.8cm，最大幅7.5cm，厚さ6cm，重さ395gを測る。表面は深形細部調整(註4)によって整形され，右側縁及び基部に原面を残す。裏面も左側縁を中心に深形細部調整によって整形されて，右側縁に原面を多く残す。刃部は礫の長軸にほぼ直交する横刃で，刃部の形態は凸刃タイプに属すると考えられる。

5は硬質砂岩製のチョッパーである。最大長9.9cm，最大幅10.5cm，厚さ5.7cm，重さ679gを測る。素材となっている礫の原形はほとんど変えておらず，素材平坦面を裏面としている。裏面から基本的には3回の極厚形細部調整によって，礫の長軸方向に直交する横刃を作りあげている。刃部が直線形を示すもので，直刃チョッパーに属すると考えられる。

6は砂岩製のチョッパーである。最大長16.8cm，最大幅9.5cm，厚さ7.7cm，重さ1,410gを測る。素材となっている礫の原形はほとんど変えておらず，素材平坦面を裏面とし，裏面から数回の極厚形細部調整によって，礫の長軸方向に直交する横刃を作りあげている。刃部が凸形を呈する凸刃チョッパーに属すると考えられる。

7は安山岩製のチョッパーである。最大長11.9cm，最大幅10.6cm，厚さ4.2cm，重さ630gを測る。素材となっている扁平礫の原形をほとんど変えておらず，安定した平坦面をもつ面を裏面としている。表面左側縁は裏面からほぼ垂直に極厚形細部調整が施され，刃部は裏面からの極厚形調整によって，礫の長軸方向に直交する横刃を作りあげている。刃部が丸味をもつ凸刃チョッパーに属すると考えられる。

8は砂岩製のチョッパーである。最大長12.1cm，最大幅9.7cm，厚さ3.5cm，重さ438gを測る。素材である礫は，節理によって剝落したものであり，その節理面を表面としている。素材短軸断面は，二等辺三角形を呈する。表面左側縁は，裏面からの薄形細部調整が施され，礫の長軸方向と平行する縦刃を作りあげている。刃部は直線形を示すことから，直刃チョッパーに属すると考えられる。

9は安山岩製の剝片である。最大長11.3cm，最大幅14.3cm，厚さ2.8cmを測る。剝片の形状は扇状を呈し，原面打面を有する。

（註3）　3枚以上からの剝離面からなる打面である（赤澤威　小田静夫　山中一郎　1980）。

（註4）　素材を整形する目的をもち，そのために，その輪郭が大幅に変わる例が多い。ただ，調整痕の範囲は，素材の幅の2分の1に及ぶもの（赤澤威　小田静夫　山中一郎　1980）。

5. ま と め

• 遺構について

前述のように当遺跡では，住居跡4棟，土壙5基，V字形溝状遺構4基及び柱穴群が検出された。これらの遺構は1例を除いて，重複関係をもたないで検出されている。また遺物の出土も非常に少ない。

住居跡は，いずれも共通の規画性をもっている。壁が確認されていないこと，柱穴が他の竪穴住居跡例と比較した場合，非常に細いこと等を考え合わせたとき，はたして竪穴住居跡であったかどうかは疑問である。住居跡の時期は，第3号住居跡ピット3出土の土器から考えると，縄文後～晩期の時期と思われる。県内で後～晩期の住居跡の検出例は少なく，泉龍寺遺跡（中村他 1963），延命寺遺跡（中村他 1969），藤橋遺跡（駒形 1977）等にあるが，本遺跡のそれとは，形態的に異る。また遺物の出土もほとんどないことから，一般居住地における住居跡であったかは，検討を要する。また，一般居住地でなかったとすれば，他に根拠地を持ち，本遺跡は，別な目的に使用されたことになる。この住居跡群と同時期か，それに近いと思われるのが，第1号土壙である。

V字形溝状遺構は，4基とも，地形の傾斜に平行し，N－28～78°－Eの間に存在していた。このV字形溝状遺構は，トラップ状遺構として分類（今村 1973，宮沢 1976）されているなかに類例を求めることができる。今村の分類ではE型，宮沢の分類ではI型にそれぞれあたるものと考えられる。県内では，岩野原遺跡（駒形他 1981）に形状の類似するものが7基ある。県外では，岩手県湯沢遺跡（縄文中期末～後期初頭）（高橋他 1978），同高柳遺跡（縄文時代中期～後期初頭）（菊地 1979）等の東北及び北海道に広く分布している。V字形溝状遺構を含めたこれらトラップ状ピットと呼ばれている土壙は，丘陵尾根，台地の縁辺部に群をなして分布していること（単独の場合もある），ほとんど集落跡とは別に存在すること，覆土中には遺物が皆無に等しいことなどが共通項としてあげられる。また機能としては狩猟施設としての陥し穴であるとの考えが一般的であるが，県内では，まだ発見例が少なく，比較検討することはできない。

縄文中期の遺構としては，土壙一基のみであるが，瓜ヶ沢遺跡周辺地域は，先学諸氏により，数多くの遺跡について詳細な表面採集が行われており，それらの採集資料を基本として，縄文中期の遺跡を概観してみたい。採集資料を実見すると，生業活動に直接かかわるものと，そうでないものが存在することに気づく。前者は，石鏃，石斧，石錐等であり，後者は，石棒，土隅，岩板等である。これらを仮に，前者のような遺物群をA群，後者をB群とする。(註1) このB群の有無をもって遺跡を2大別してみると，第1図に示した魚野川流域には67ヶ所の遺跡が存在するが，そのうちB群が出土している遺跡は14ヶ所で，魚野川及びその支流であ

る破間川，羽根川，佐梨川等に面した段丘上に存在していることがわかる。これらB群を出土する遺跡は，広範囲から，量的にも多くの遺物を採集できる場合が多い。したがって，他の遺跡と比べた時，「大きな遺跡」(註2)という言葉で形容できるであろう。これら大きな遺跡は，いわゆる本拠地としての居住区域と考えられ，また他の遺跡は，彼らの広域生活圏としてのテリトリー内における狩猟の場・採集の場，石器・土器等の原材料採取の場，または移動の際の一時的居住地といった形で残されたものと考えられる。このようなことから瓜ヶ沢遺跡に残された遺構，つまり，縄文中期では，土壙一基のみで，住居跡はなく，B群の遺物も検出されなかったことからその性格は明確でないものの，本拠地としての居住地に対して，有機的に関連(註3)していた遺跡であったと関係づけることができるものと考えられる。また，このことは，他の遺構についても言うことができ，一つの台地でも，利用のされ方が異り，また変化していったことが想定できる。

・遺物について

第2号土壙出土の土器は，半截竹管文，三角形沈刻文，沈線文，縄文，突起の組み合せによって文様を構成している。この中で特徴的なものが蓮華文で，口縁部文様帯の中に三角形沈刻文の位置によって3つのバラエティを認めることができる。A類－上部のみ三角形沈刻文による蓮華文，B類－上下交互の三角形沈刻により鋸歯状になる蓮華文，C類－上下の三角形沈刻により亀甲状になる蓮華文で中央に刺突が施されるものの三種である。蓮華文の分類及び変遷については，県立三条商業高校社会科クラブ考古班が行っている（三商考古班　1974)。これによれば蓮華文は施文技法によってX・Y・Zのグループに分類されている。本土器の蓮華文A～C類は，すべてXグループにあたる。A類は県内各遺跡で出土が知られる。B類は安田町中道遺跡第2類（川上他　1980)，巻町松郷屋遺跡下層式第2類（上原　1956)，C類は津南町上野遺跡第2類B（江坂他　1962）にあり，またC類で無文のものが吉野屋遺跡第7類A（三商考古班　1974）にあるが，1個の土器で3種の技法を用いているのは少ない。本土器は，「沈刻でなく竹管文の施文による蓮華文」をもつ千石原Ⅱ式よりも一段階古く，「三角形沈刻文の施文による蓮華文」をもつ千石原Ⅰ，古屋敷A段階にあたる。そして，この千石原Ⅰ・古屋敷A段階の中でも，本土器は，部分的ではあるが，三角形沈刻文による鋸歯文，口縁部から垂下する逆勾玉状の突起といったより古い様相を残している。

先土器時代の資料は，表採・根切り溝中出土・単独出土であって，まったく共伴関係の事実を知ることはできない。また，先土器時代遺物包含層の追求試掘によっても，炭化粒，礫の集中，散在はまったく認められなかった。出土量が少ないことや，検出状況から，時期細別は不詳である。その中でナイフ形石器は，形態・製作技術から，第Ⅱb亜文化期に大枠位置付けられると考えられる。またチョッピングトゥール，チョッパーが，これら第Ⅱb亜文

化期に存在するか否かについては判断できない。その中でも，チョッピングトゥール（第13図　4），チョッパー（第13図　5・6）については，形態的にしっかりしていることから，第Ⅰ文化期に属する可能性もある。

以上のように瓜ヶ沢遺跡は，遺物・遺構とも散発的な在り方を示し，一般居住地としての形態を持ち合わせていない。表面採集ではほとんど採集できなかったものの，このように，小遺跡の在り方に少しでもせまり得たことは，貴重と言える。縄文遺跡の多い当地域では，今後このような遺跡を追求することにより，より縄文文化に踏み込んでいけるのではないかと考えている。

（註１）　『ビンフォードが指摘する「文化システムを構成するサブシステムとしてのテクノミック・社会技術・思想技術」（Lewis. R. Binford. 1962）』を井川史子が紹介している（井川史子 1976）。この概念によれば，Ａ群はテクノミック・Ｂ群は思想技術の範疇に含まれる。また，小林達雄が遺跡のあり方を類型化するためにもちいた共通性の抽象化概念に含まれる（小林　1973）。これによればＡ群はＡ～Ｅパターンに存在し，Ｂ群はＡパターンのみに含まれる。

（註２）　小林達雄の遺跡のあり方の類型化によるとＡパターンに属する（小林　1973）。

（註３）　「セトルメント・パターンの組み合わせ形態は，単なるセトルメント・パターンの集合ではなく，そこに占拠する集団の狩猟・採集活動をはじめとした社会全般に対する構造体として理解されねばならない。」と指摘し，集団の行動様式から社会構造までを反映する概念を小林達雄は提示している（小林　1973）。またこれ以前にこの理念上の概念を，渡辺仁は現実の社会集団であるアイヌ民族の生業活動調査を通じて，KOTAN の分布と生態ゾーンの研究として発表している（渡辺　1964）。

参　考　文　献

赤澤　威・小田静夫・山中一郎　1980　『日本の旧石器』　立風書房

井川史子　1976　「旧石器文化研究の方法論」『日本の旧石器文化　5　旧石器文化の研究法』　雄山閣

池田　亨　1979　『上の原遺跡　新潟県北魚沼郡堀之内町上の原遺跡調査報告書』　堀之内町文化財調査報告書　第１輯　堀之内町教育委員会

池田　亨　1981　『原・居平遺跡　新潟県北魚沼郡堀之内町原・居平遺跡発掘調査報告書（居平１号塚発掘調査報告書）』　堀之内町文化財報告書第２輯　堀之内町教育委員会

上原甲子郎　1956　「弥彦角田山周辺古文化遺跡概観」『弥彦角田山周辺総合調査報告書』　新潟県文化財年報第一集　新潟県教育委員会

江坂輝彌　1962　『上野遺跡』　津南町文化財調査報告４　津南町教育委員会

金子拓男　他　1980　『日本城郭大系第７巻　新潟，富山，石川』　新人物往来社

川上貞雄・家田順一郎・渡辺文男　他　1980　『上野林丘陵埋蔵文化財発掘調査報告Ⅳ（概報）

中道遺跡』　安田町文化財調査報告(7)　安田町教育委員会
菊地郁雄　1979　「高柳遺跡」『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書－Ⅰ－』
今村啓爾　他　1973　『霧ヶ丘』　武蔵野美術大学考古学研究会
小林達雄　1973　「多摩ニュータウンの先住者－主として縄文時代のセトルメント・システムについて－」『月刊文化財　昭和48年1月号』
駒形敏朗・寺崎裕介　1981　『埋蔵文化財発掘調査報告書岩野原遺跡』　長岡市教育委員会
斉藤秀平　1937　『新潟県史跡天然記念物調査報告』　第七輯　新潟県
佐藤雅一　1981　「五十嵐川流域の先土器時代遺跡」『三条考古学研究会機関誌第2号』　三条考古学研究会
鈴木郁夫　他　1977　『新潟県中越地域土地分類基本調査小千谷5万分の1』　新潟県農地部農地整備課
高橋信雄・高橋文夫・三浦謙一　1978　『都南村　湯沢遺跡（昭和52年度）』　岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書第2集　（財）岩手県埋蔵文化財センター
長者ヶ平遺跡発掘調査団　1981　『長者ヶ平遺跡』　小木町教育委員会
中島栄一　他　1976　『古屋敷遺跡　新潟県南蒲原郡田上町古屋敷遺跡調査報告書』　田上町文化財調査報告書第2輯　田上町教育委員会
中村孝三郎・小林達雄・金子拓男　1963　「新潟県中魚沼郡中里村泉龍寺遺跡発掘調査報告」『上代文化第33集』　国学院大学
中村孝三郎・金子拓男・若松　茂・稲岡　嘉彰　1969　『縄文時代の延命寺ヶ原』　小国町教育委員会
中村孝三郎・小林達雄　1975　「月岡遺跡」『日本の旧石器文化　2　遺跡と遺物〈上〉』　雄山閣
新潟県立三条商業高校社会科クラブ考古班　1974　『吉野屋遺跡』　調査報告第5冊　県立三条商業高校社会科クラブ考古班
星野芳郎・井口通泰　1968　『新潟県北魚沼郡小出，堀之内，川口地区遺跡調査概覧』
星野芳郎　1969　「魚野川流域の史前文化について〈遺跡，遺物を中心として〉」
堀之内町史編集委員会　1959　『堀之内町史』　堀之内町
宮沢　寛・今井康博　1976　「縄文時代早期後半における土壙をめぐる諸問題－いわゆる落し穴について－」『港北ニュータウン　1976　調査研究集録』第1冊　港北ニュータウン遺跡調査団
渡辺　仁　1964　「アイヌの生態と本邦先史学の問題」『人類学雑誌』第七十二巻第一号　日本人類学会

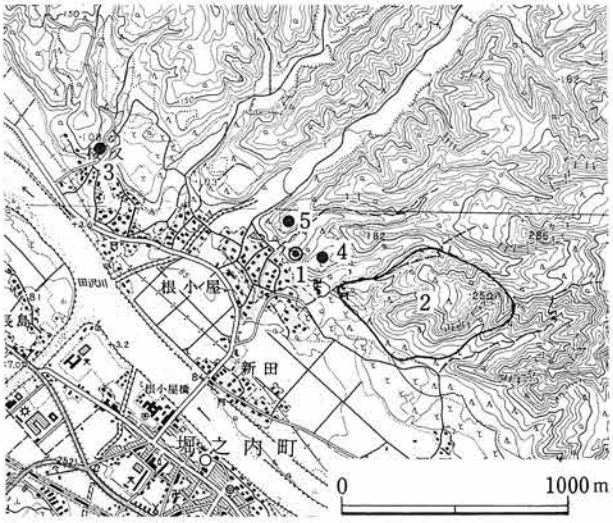
滝　沢　の　塚

1. 調査概要（第14・15・16図，図版12・13・14）

本塚は新潟県北魚沼郡堀之内町大字根小屋3069-1番地に所在する。同所は標高約125m，魚野川との比高約30mの，瓜ヶ沢遺跡と権現平遺跡とに挟まれた細尾根の先端に位置する。発見の契機となったのは，昭和55年度の権現平・瓜ヶ沢遺跡の発掘調査の際に，両遺跡に挟まれた細尾根の一部がくびれており，堀切りと考えられたことによる。しかし，このくびれを挟む1段目と2段目の平坦部（第15図）はかつて畑で，くびれはその畑境溝であり，堀切りではないことが判明した。一方，雑木の伐採により，この尾根の先端には，高速道路法線に東半分がかかる，方形プランの塚が存在することが判明した。なお「滝沢の塚」という名称は，位置する尾根に呼称がないため，南側の沢名「滝の沢」をとり命名したものである。なお，発掘面積は200㎡である。調査体制は「瓜ヶ沢遺跡」を参照されたい。

A 調査方法

昭和55年度の調査では，尾根全体の地形測量と法線内・塚東半部中央の東西トレンチ（E－0ライン・第16図）の試掘を行った。その結果「本塚が削り出しで築造されている」という結論を得た。翌56年度には，法線外も含む，塚全体の調査を行った。当初「削り出し」との結論を踏まえ，E－0ラインにほぼ直交し，塚を南北に半割するA－Bラインを基線として，2分割による調査を進めた。しかし途中で「西半部を中心に盛土されている」ことが判明したため，0－Fラインを設定し，4分割する方法に変更し，さらにC－Dラインを設定した（第16図）。



1.滝沢の塚　2.根小屋城跡　3.行人塚
4.瓜ヶ沢遺跡　5.権現平遺跡

第14図　滝沢の塚周辺図
（国土地理院「小出」「小平尾」1:25,000原図 昭和51年発行）

B 日誌抄

昭和55年度　11月4日～20日

11月4日　堀切りと覚しき尾根のくびれを発見する。

11月6・8・10～12日　山城に係る遺構とも考えられるため，尾根全体の地形測量と法線内の雑木伐採を行い，尾根先端に本塚を発見する。

11月17日　塚全体を露呈させるために，土地所有者渡部好夫氏の了解を得て，法線外の塚西半部を含む尾根先の雑木伐採する。

11月18・19日　本塚東半部の東西トレンチとほかに尾根の1段目・2段目の平坦部とその間のくびれ部にも試掘を行い，断面を実測する。そ

の結果，本塚は削り出して築造されていること，山城に係る遺構は存在しないことを確認する。

11月20日　塚平面を実測し（1/40），55年度の調査を終了する。

昭和56年度　6月1日～7月1日

6月1日～5日　発掘調査準備のため，調査担当者が現地入りし，1日に本塚法線外部分土地所有者渡部氏に発掘調査の承諾を得る。4日には雑木の伐採を行う。

6月8日　発掘調査開始（瓜ヶ沢遺跡）。

6月12日　昨年度の平面図に補足実測し，またA－Bラインを設定する（第16図）。

6月16・17・19・23・24日　A－Bの東半部の表土を剝ぎ，引き続き西半部の表土剝ぎを行う。A－B断面の写真撮影及び実測をする。雨天の中，雑木の根が多く，作業は難行する。本塚が単なる方形の塚ではなく，各辺に張り出しをもつこと，また西半部を中心に盛土されている可能性があることを確認する。

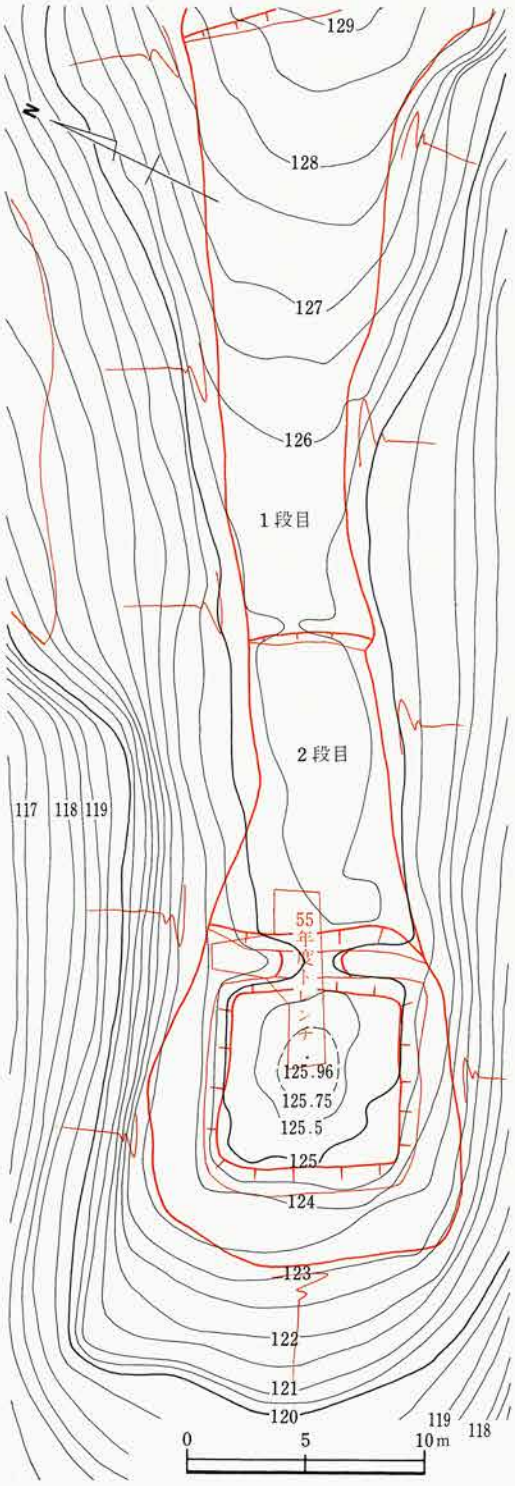
6月25～30日　築造時の原形と推定される状態での写真撮影及び実測を行う。次に盛土部分確認のため，新規にO－F・C－Dラインを設定し，盛土の発掘を行う。C－D・O－F断面の写真撮影・実測及びA－B断面の補足実測をする。完掘状況の写真撮影を行う。

7月1日　完掘状況を実測し，A－Bに沿って現面を30cm掘り下げ，現面が基盤であることを確認し，発掘作業を完了する。

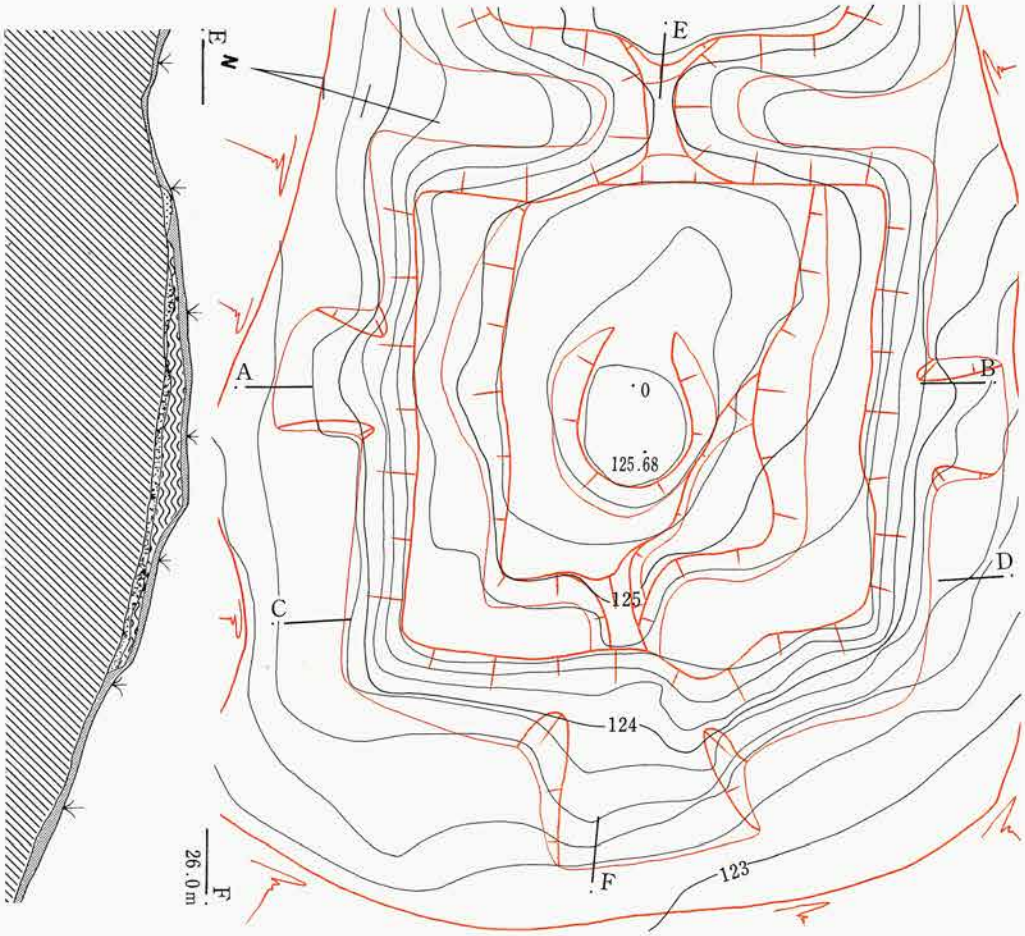
2.　遺　　構（第15・16図，図版12・13・14）

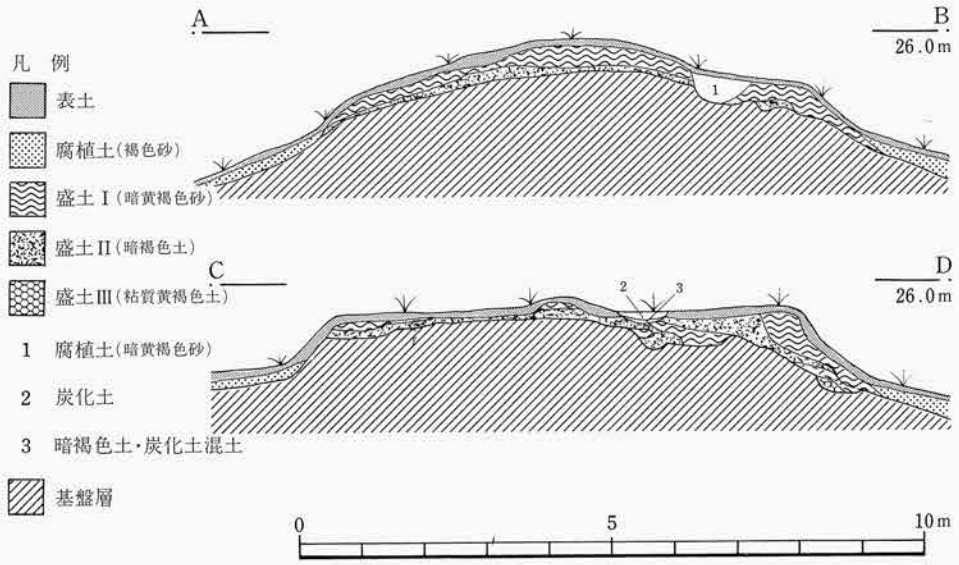
本塚は細尾根の先端に単独で築造されたものである。当初単なる方形プランの塚に見えたが，発掘調査により，その各辺中央に張り出しの付くことが判明した。

本塚の形状は，平面は正方形で，その各辺がほぼ方位に一致する（N－18°－W）。底面では南北9.6m・東西10m，上面では南北7.5m・東西7.8mを測る。断面は台形を呈し，高さ2.2m



第15図　滝沢の塚現況図





第16図　滝沢の塚実測図

である。上面には南・北２辺に平行して，高さ0.1～0.2mの低い段がある。さらに上面中央には楕円形プランの盛り上がりがあり，長径３m・短径2.4m・高さ約0.2mを測る。各４辺中央の張り出しのうち，北・西・南３辺のものは滑り台状になだらかに傾斜しており，東辺のものは土橋状に東へのびて尾根に連なっている。南・北２辺の張り出しはともに幅２mで対をなしている。東・西２辺の張り出しは，互いに形状は異なるが，幅は東辺のもの３m，西辺のもの3.2mで，ほぼ同一の幅であり，やはり対をなすものであろう。

この塚は，基本的には細尾根の先端側面を削って形成したもので，その一連の作業として，西半部を中心に盛土がなされている。（これは，尾根が西側へ傾斜しており，塚頂部に平らな面をつくるには，塚頂部を削るより，側面を削って出た土で盛土をした方が手軽なため，２つの方法を併用したのであろう。）盛土は，砂質の基盤上に盛土Ⅱ；暗褐色土（腐植土），盛土Ⅰ；暗黄褐色砂（地山に腐植土が混じった土）を順次積んでいる。ただし南西部は基盤が大きく崩壊しているために，特に盛土が厚くなり，盛土Ⅲ；粘質黄褐色土を局部的に積んでいる。盛土Ⅱは，ところによっては塚築造前の表土の可能性も考えられるが，その下に盛土Ⅰ・Ⅱが盛られているところもあり，盛土とした。

本塚には内部施設は認められないが，塚上面で，落ち込み３基が検出されている。これらは近年の焚き火跡及び抜根跡と判断し，第17図の平面図から除外した。以下にその概略を述べる。焚き火跡はＣ－Ｄ断面にみえているもので，地表面で確認され，下層より，暗褐色土と炭化土の混り土，次に炭化土が堆積し，この２層はともにしまりがない。抜根跡は２ヶ所あり，そのうちの１ヶ所はＡ－Ｂ断面に見えているもので，表土下で確認されたが，不定形プランで，しまりのない黄褐色砂に根毛が多く混入した腐植土が堆積していた。もう１ヶ所は南西部角付近の地表の窪みで確認したもので，不定形プランで，表土が堆積していた。

3. 遺　　物（第17図）

出土遺物は近世陶器片１点，剝片石器１点の２点のみである。第17図１は壺の類で，塚上面西側の表土中から出土した。削り出し高台で，体外面・高台内面には淡青白色の釉が施され，体内面にも釉の流がある。この陶器は本塚にともなう可能性もある。２は流紋岩製の剝片石器で，塚上面表土中より出土した。裏面右側縁には二次剝離が施され，折断面には２面の剝離面が認められる。

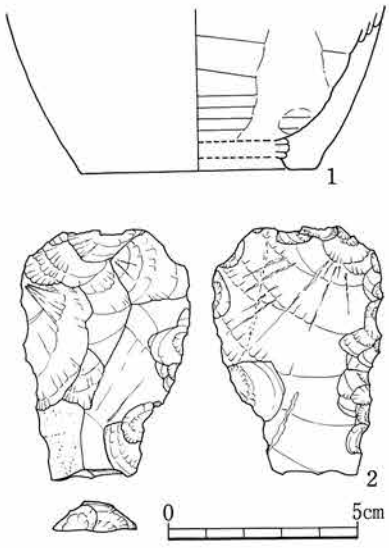
4. ま と め

塚が宗教・信仰と深く係っているのは周知のことであるが，その機能は大きく埋納と奉載の２つに分けられる。埋納機能とは墓・経塚などにみられる「ものを埋め納める」機能，奉載機能とは十三塚・庚申塚・修法壇などにみられる「抽象的対象を具現もしくは奉載する」

機能である。ほかに一里塚・藩堺塚と呼ばれる宗教・信仰とは全く関係がなく，政治的・行政的な意図で築かれた異質な塚もある（金子　他　1974，波田野　1980ａ）。

今回調査の対象となった滝沢の塚の機能について検討してみたい。この塚の形状的な特徴としては，①　正方形プランの塚，②　その上面中央の盛り上がり，③　各４辺中央の張り出し，④　内部施設をもたないことがあげられる。方形プランの塚は「川治百塚第６号塚」（金子　他　1974）で５種に分類されている。その中で，本塚は内部施設をもたないことから，Ａ型「密教の修法壇」あるいはＢ型「（塚＝仏）の関係にある塚」に対比される。また上面中央の盛り上がりは三島郡寺泊町桐原石部神社御廟所（波田野　他　1980ｂ）の塚にもみられる。御廟所の塚の盛り上がりには，発掘調査時まで，石祠が奉載されていた。この塚と滝沢の塚を比較した場合，滝沢の塚の盛り上がりも奉載施設と考えられる。さらに，地元には「行者を埋めた」との言い伝えがあるが，内部施設はなく，埋納機能をもたないことは明白である。以上のことから，本塚は奉載機能をもつもので，この塚を土壇として，盛り上がり付近に信仰対象物を安置し，奉ったとして問題ないであろう。そして，各４辺の張り出しは，この土壇への参道と推測される。さらに東・西２辺の張り出しは幅約３ｍ，南・北２辺のものは幅２ｍと，違いがあることから，表参道と脇道の区別のあったこともうかがえる。

この塚上に奉られていたものについては，史料１・２(註)によって知ることができる。この２つの史料にはともに旧根小屋村の北，瓜ヶ沢の続きの滝沢口あるいは滝沢と称する峰先に，神明宮の石祠・湯殿山の石塔・月山の石塔の三社があり，これらは修験者によって管理されていたことが書かれている。「滝沢口あるいは滝沢」という呼称は現存しない。しかし，現在根小屋地内を見回したところ，瓜ヶ沢の平の隣であること，南側の沢が滝の沢であることから「滝沢口あるいは滝沢と称する峰先」は本塚の位置以外には考えられない。さらに史料１「壱籬（ひとまがき）之土壇」の土壇とは本塚を直接指している。このことから，上記の３社（神明宮・湯殿山・月山）が滝沢の塚に奉られていたと判断した。



第17図　出　土　遺　物

滝沢の塚の築造年代は明確ではない。３社のうち，神明宮を地方に勧請する風は中世末期の戦乱の頃生じたもの（柳田　1951）であり，出羽三山信仰のうち，

（註）　史料１は徳川氏領会津藩小出島陣屋代官所への提出書類の写し。史料２は柏崎県小千谷出張所への提出書類の写し。

湯殿山信仰が南魚沼地方などで広く信じられるようになったのは近世中・末期以後と考えられている（早川他　1981）。今回の調査では，この土壇に元来３社が奉られていたのか，あるいは神明宮が奉られていた土壇上に，後に月山・湯殿山をも併せて奉ったものか定かではない。そうではあるが，史料１は嘉永４年（1851）に書かれており，19世紀中頃にはこの土壇上に３社が奉られていたことは間違いない。そして，この塚が奉載機能をもって存続した期間であるが，調査員滝沢が土地の古老から「大正初期まではここに祠を奉っていたが，当時の土地所有者がこれを廃棄し，土地を転売した。」という話を20～30年前に伝え聞いている。この「転売した」ことは土地謄本で証明されており，「祠を廃棄した」ことも事実と考えられ，この塚が大正初期までは奉載機能をもつ土壇であったことがわかる。

滝沢の塚の南西方向には，修験道の霊山八海山も望見でき，この地は信仰の場として良好な位置と思われる。近年まで奉載機能をもつ土壇の役目をはたしていたことから，近年の焚火跡や近世陶器もそれぞれ祭祀の上で役割をもっていた可能性が考えられる。

参　考　文　献

金子拓男・戸根与八郎　1974　『北越北線埋蔵文化財発掘調査報告書』　埋蔵文化財緊急調査報告書第２　新潟県教育委員会

波田野至郎　1980ａ　「中・近世考古学の動向－塚　越後の塚」『月刊考古学ジャーナル臨時増刊号No.182』　ニュー・サイエンス社

波田野至郎・他　1980ｂ　『国立寺泊療養所建設埋蔵文化財発掘調査報告書　桐原石部神社御廟所』　新潟県埋蔵文化財調査報告書第23　新潟県教育委員会

早川　徹　1981　「第一章　南魚沼修験の歴史と伝承」　『修験者と地域社会－新潟県南魚沼の修験道－』　宮家　準編　慶応義塾大学宮家研究室報告Ⅱ　名著出版

柳田国男　監修　1951　『民俗学辞典』　民俗学研究所

史料1　　小出永楽屋文書

嘉永四年　小出島組明細帳

根小屋村

一、神明宮石祠湯殿山石塔月山同断三社共ニ村北瓜ヶ沢平之続キ滝沢口と申候小峰之端ニ壱籬之土壇之上ニ在之候　当村山伏明王院金剛院月祥禅院年番ニ而支配仕来リ候

史料2　　四日町田中大和家文書

明治四年　石祠取調書

宇加地郷根小屋村

一、月山　石塔但破間産自然石ニ刻

一、湯殿山　石同断

一、神明宮　石祠

右三基共建立年月ノ刻銘ナシ　当村北方滝沢ト称スル峰先ニ在之当村守験之者先年ヨリ支配ス　村中持ナリ

七　久　保　遺　跡

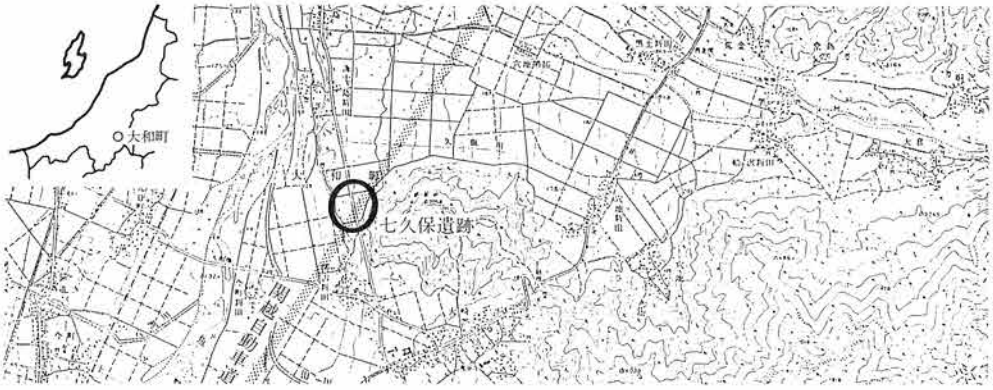
1. 遺跡の所在地

七久保遺跡は，南魚沼郡大和町大字大崎字七久保1388番地他に所在し，魚野川の支流である水無川および田川が構成する複合扇状地の南端，標高約140ｍのところに立地している。

2. 調査に至る経緯

昭和52年８月，県教育委員会が実施した南魚沼郡遺跡詳細分布調査の際，従前から平安時代の稀薄な遺物散布地として知られていた七久保（旧称　湯崎）遺跡に隣接して，縄文時代および平安時代の遺物包含地を新たに確認した。この遺跡を坊谷山下遺跡（仮称）として台帳に登録したが，昭和54年４月，関越自動車道建設にかかる遺跡分布調査において，前記の七久保遺跡とともに法線敷にかかることが判明した。なおこの２遺跡は隣接し，範囲も重なる可能性があったため，一連の遺跡として一括し「七久保遺跡」として取り扱うことにし，この旨を日本道路公団へ通知した。同年11月，日本道路公団から昭和55年度埋蔵文化財の発掘調査についての協議が上げられ，県教育委員会では道路建設以前に発掘調査を実施することとした。

昭和55年，日本道路公団により遺跡の大部分の範囲について工事が着工され，掘削もほぼ完了しているという通報を得，県教育委員会では至急現地を確認した後，公団に対し厳重に注意を行った。また本遺跡の取り扱いについては，掘削されなかった遺跡の縁辺部と推定される範囲について，発掘調査を実施することとした。昭和56年３月，日本道路公団による県道迂回工事および農業用送水パイプの付け替え埋設工事に伴い，２ｍの積雪を排して確認調査を実施した。しかし，遺構および遺物包含層は認められず，また扇状地南端の崖線付近を除いた扇端部で，過去の農業基盤整備事業による大規模な土砂の移動のあることを確認した。昭和56年６月，以上の経過から，扇端部においては大規模な土砂の移動はあるものの，南端の崖線付近では遺物包含層が残存する可能性があると判断して発掘調査に着手した。



第18図　七久保遺跡と周辺の地形

（国土地理院「五日町」1:25,000原図 昭和50年発行）

3. 調査体制

県教育委員会は日本道路公団から委託を受け，昭和56年６月１日～７月25日の間，下記の体制をもって発掘調査を実施することとした。

調査主体	新潟県教育委員会	（教育長	久間　健二）
総　括	新潟県教育庁文化行政課長		南　義昌
管　理	〃	課長補佐	石山　欣弥
庶　務	〃	副参事	近藤　信夫
指　導	〃	係　長	金子　拓男
調査担当	〃	学芸員	藤巻　正信
調査員	〃	〃	斉藤　基生
〃	〃	嘱　託	佐藤　雅一
〃	〃	〃	品田　高志
〃	新潟県文化財保護指導委員		細矢　菊治

なお下記の方々に御協力をいただいた。ここに記して感謝の意を表するものである。

大和町教育委員会，日本道路公団，海士島新田，今町新田，鰕島，柳古新田の各地区および百歳会の有志

4. 調査の方法（第19図参照）

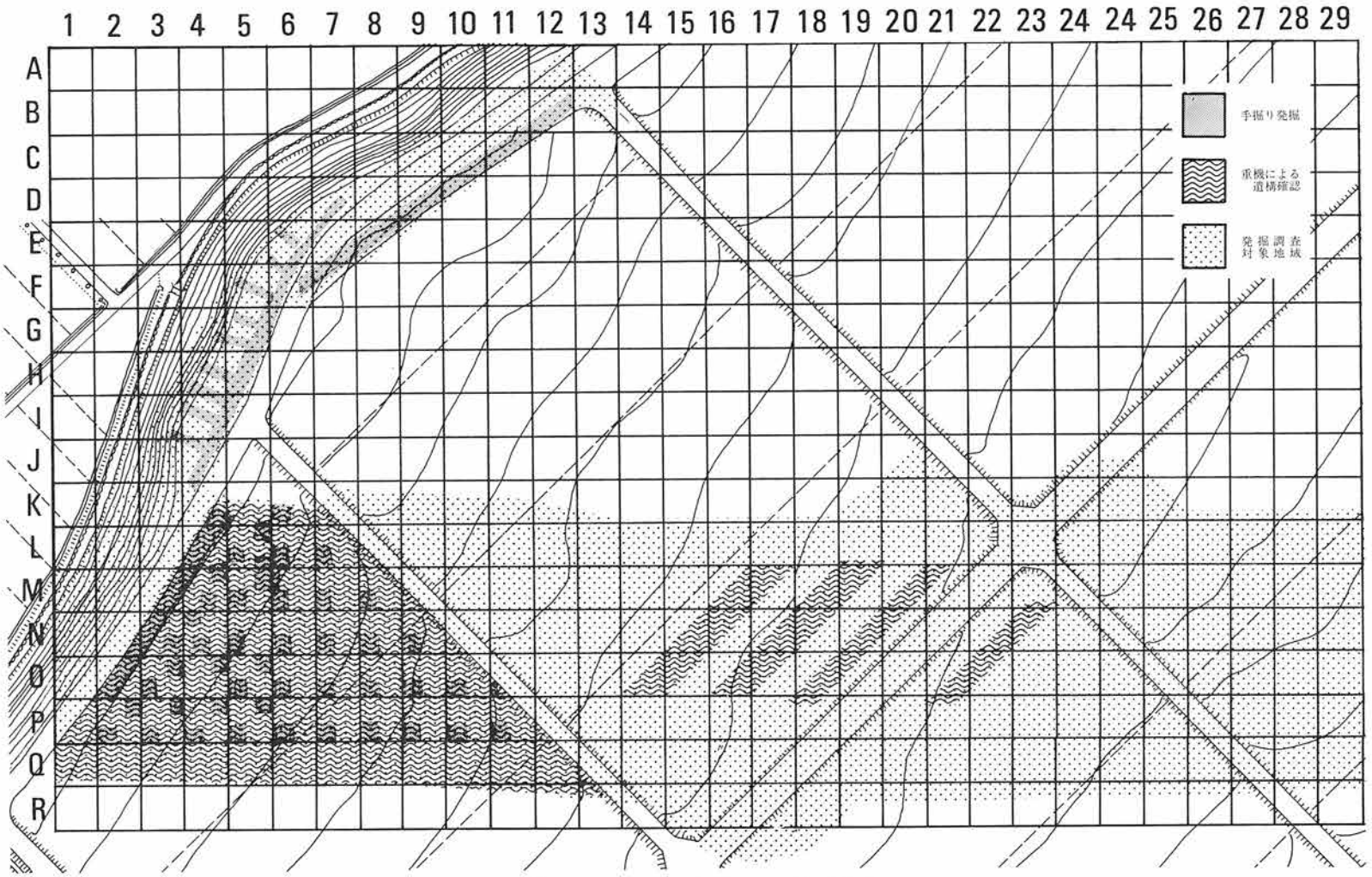
昭和56年３月の確認調査の結果を踏まえ，調査地域は最南端の農道を基準にして南をＡ，北をＢ地区とした。さらに一部工事区域が，西側崖線付近におよぶことが判明したため，その地域をＣ地区とした。遺構，遺物残存の可能性が推定される崖線寄りのＡ，Ｃ地区は作業員による発掘，土砂の移動がはっきりしているＢ地区は重機による発掘を行った。途中でＡ地区も土砂の移動を受けていることが判明したため，重機による発掘に切替えた。Ａ，Ｂ地区は10×10ｍのグリッドを設定し，Ｃ地区は任意にトレンチを設けた。

5. 調査の経過（調査日誌抄）

発掘調査は当初19,450㎡を対象としたが，側道部分拡張により最終的に21,950㎡となり，うち7,103㎡を調査した。期間は６月１日～７月25日を予定したが，調査の結果遺構，遺物包含層が存在しないため，６月13日で調査を打ち切りとした。

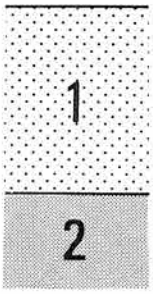
６月１日　新潟から器材搬入，設定しておいたプレハブに収納する。日本道路公団担当者，大和町教育委員会社会教育課長来跡，最後の打合わせの後大和町教育委員会へ挨拶を行う。

６月２日　作業員に発掘調査の目的，要領を説明し，安全衛生教育を行う。その後，全面



第19図　グリッド設定及び発掘方法表示

の遺物表面採集を試みたが採集されなかった。A地区は作業員，B地区はバックホーによる表土除去を開始する。A地区では暗褐色土と粘性黄色土ブロックの平均層厚60cmの混合層，以下基盤が確認されたのみで，遺構，遺物包含層は検出されなかった。また基盤確認面に重機のキャタピラ痕を検出した。以上から，当該地域は基盤上面まで大規模な土砂の移動を受けたことが判明した。



第20図
基本土層柱状図

6月3日　A地区で倒木痕検出，覆土中からビニール片が出土した。当該地域は昔杉林であったというが，農地整備で立木が倒されたのであろう。

6月4日　B地区はA～Dトレンチまで表土除去完了。確認調査時の観察どうり大規模な土砂の移動を受けたことが明白になった。なお崖線に沿って側道部分の改良工事を行うことが知られたため，この部分も調査範囲とし新たにF，Gトレンチを設定した。

6月8日　これまでA～G－2～11区を試掘したが，遺構・遺物包含層は検出されなかった。遺跡であることに疑問を持ちながらも，未発掘地に遺構の存在する可能性もあることから，遺構の有無確認を目的として全面排土を実施することとした。この作業は時間節約のため重機を使用した。一方，F，Gトレンチに着手する。Fトレンチ周辺は農地整備等による撹乱を受けておらず，良好な遺物包含層が期待できるものと思われた。

6月9日～12日　調査全域を精査した結果，倒木痕数基を確認したほか遺構・遺物は皆無であった。10日で調査を打切り，その後図面整理，写真整理，写真撮影を行い，器材を搬出し終了した。

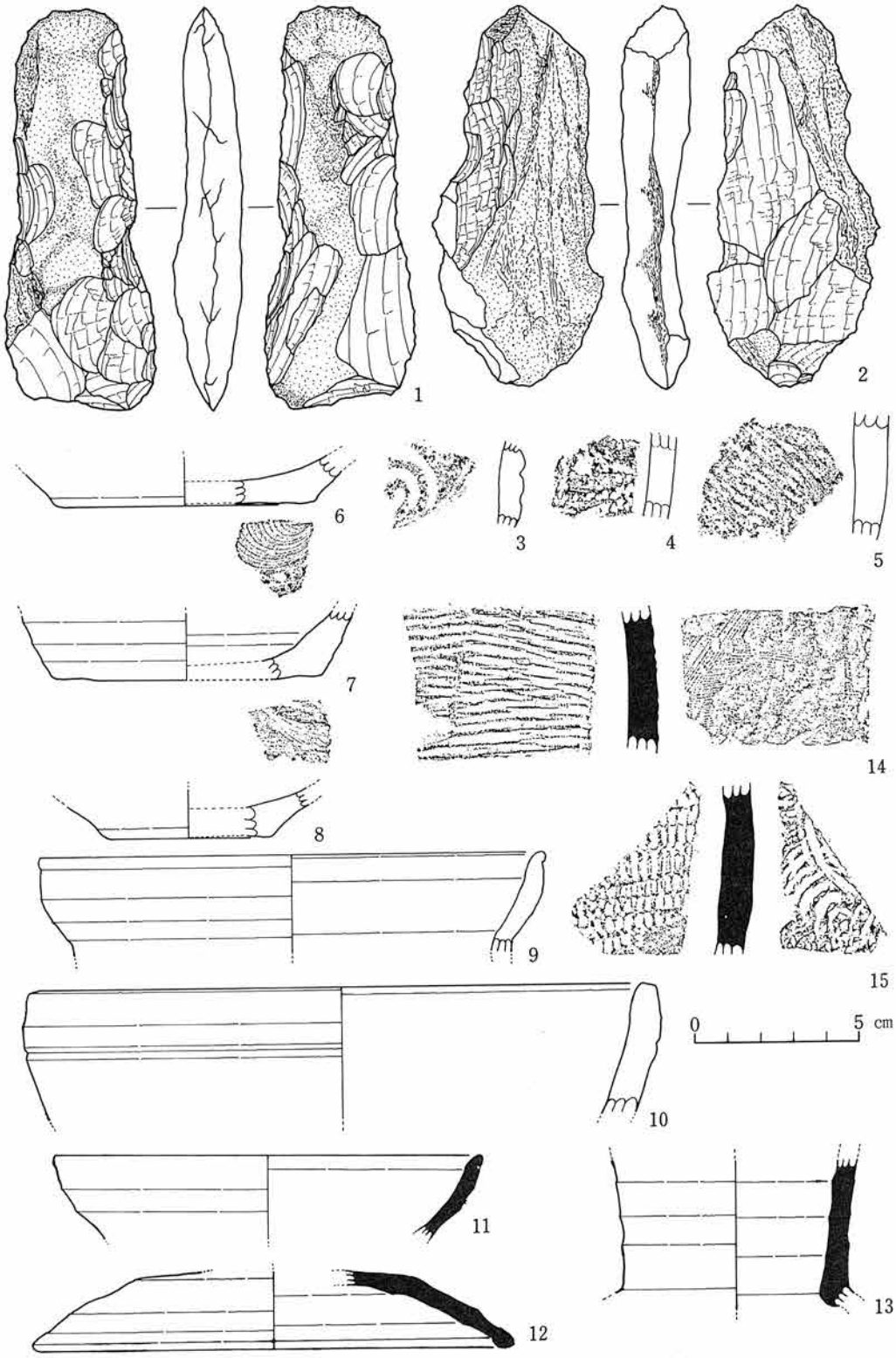
6. 遺　　物（第21図）

本遺跡は過去の農業基盤整備事業により，大規模な土砂の移動を受けている。このため，発掘調査における遺物の検出は皆無であった。そのため，以前表面採集調査で得られた資料を紹介することとした。

縄文時代

石器　1は最大長12.0cm，最大幅4.5cm，最厚2.1cm，重量140gの打製石斧である。粘板岩の偏平礫を原材としており，表裏両面に多くの原面が残る。2は最大長11.5cm，最大幅5.0cm，最厚2.1cm，重量113gの打製石斧である。粘板岩の偏平礫を原材として，粗雑な調整剥離によって形を整えている。

土器　3は胴部破片で，隆起線による渦巻文が施文されている。胎土に白色粗粒砂を含み，明褐色を呈する。4は胴部破片で，LRの縄文を施文した後，幅0.7cmの竹管文が横方向に施文されている。5も胴部で，胎土に白色粗粒砂を含み，明褐色を呈する。



第21図　表面採集資料

平安時代の遺物

土師器　6～8は杯の底部破片である。いずれも明るい褐色を呈し，胎土に細粒ないし粗粒砂の混入をみる。6，7は糸切り痕を有するが8の切り離し法は不明である。底部からの立上がり角度は6，8が56度，7が58度である。底径は6が7.8cm，7が8.1cm，8が5.2cmと推定される。9は甕の口縁部破片である。胎土に雲母片を含み，褐色を呈する。口縁はゆるく開き直立し，端部が丸味をもって突出する。口径は推定15.4cmを測る。10は鉢の口縁部破片である。胎土に白色砂を含み，暗褐色を呈する。口縁はゆるく内反し，端部は平坦である。口径は推定19cmである。

須恵器　11は杯の口縁部破片である。胎土に細粒砂を含み，口径は推定13cmである。12は蓋の破片である。胎土に白色砂を多く含み，口径は推定14.6cmを測る。13は長頸壺の頸部破片である。胎土に白色砂を含む。頸部径は推定6.8cmである。14・15は甕の胴部破片である。14の外面は平行敲き目，内面は円形のくぼみと刷目状の調整痕を認めることができる。15は外面が格子目，内面が同心円状の敲き目によって調整されている。

7. ま と め

本遺跡は昭和56年3月に踏査した折，遺物が表面採集された。それに基づき試掘調査を実施したが，試掘調査の成果は道路公団の工事工程の関係で，充分に検討されないまま本調査に入らざるを得なかった。本調査では遺構・遺物が検出されなかった。そのため調査期間は当初予定の1/4で終了した。遺構・遺物が本調査において検出されなかった事由としては以下のことが考えられる。

1　遺跡の規模が小さく，今回の調査地域までは広がっていなかった。

2　遺跡は調査地域内に存在したが，昭和55年の道路公団による工事で壊滅した。

3　遺跡は調査地域内に存在せず，周辺に立地する遺跡から農業基盤整備事業の際に遺物が調査地域内に運び込まれた。

以上三点の事由を挙げたがこのうち一つの事由によるものか，複数の事由によるものかは判然としない。今回の調査では工事施工前における確認調査と調査結果を検討する時間的余裕をもつことができたならば，より調査範囲を限定して実効のある調査が可能であったと思うのである。

苗　場　山　城　跡

Ⅰ 調査の経緯

1. 調査に至る経過

昭和53年11月に日本道路公団から新潟県教育委員会へ，関越自動車道建設に伴い小出工事事務所管内における土取場候補地について埋蔵文化財分布調査の依頼があった。これを受けて新潟県教育委員会は同年12月に同候補地である南魚沼郡大和町大字大崎字堂平周辺の分布調査を実施した。その結果，同候補地の丘陵には苗場山城跡が存在し，土取り対象地域内には濠一基が存在することが判明した。新潟県教育委員会はこの結果をもとに道路公団と協議を重ね，土取り部分にかかる濠一基を発掘調査することとした。発掘調査は昭和56年度に実施されることとなった。

2. 発掘調査の経過

発掘調査は新潟県教育委員会が調査主体となり，大和町教育委員会および地元の協力を得て昭和56年６月15日～６月19日までの５日間にわたって実施された。

調査日誌抄

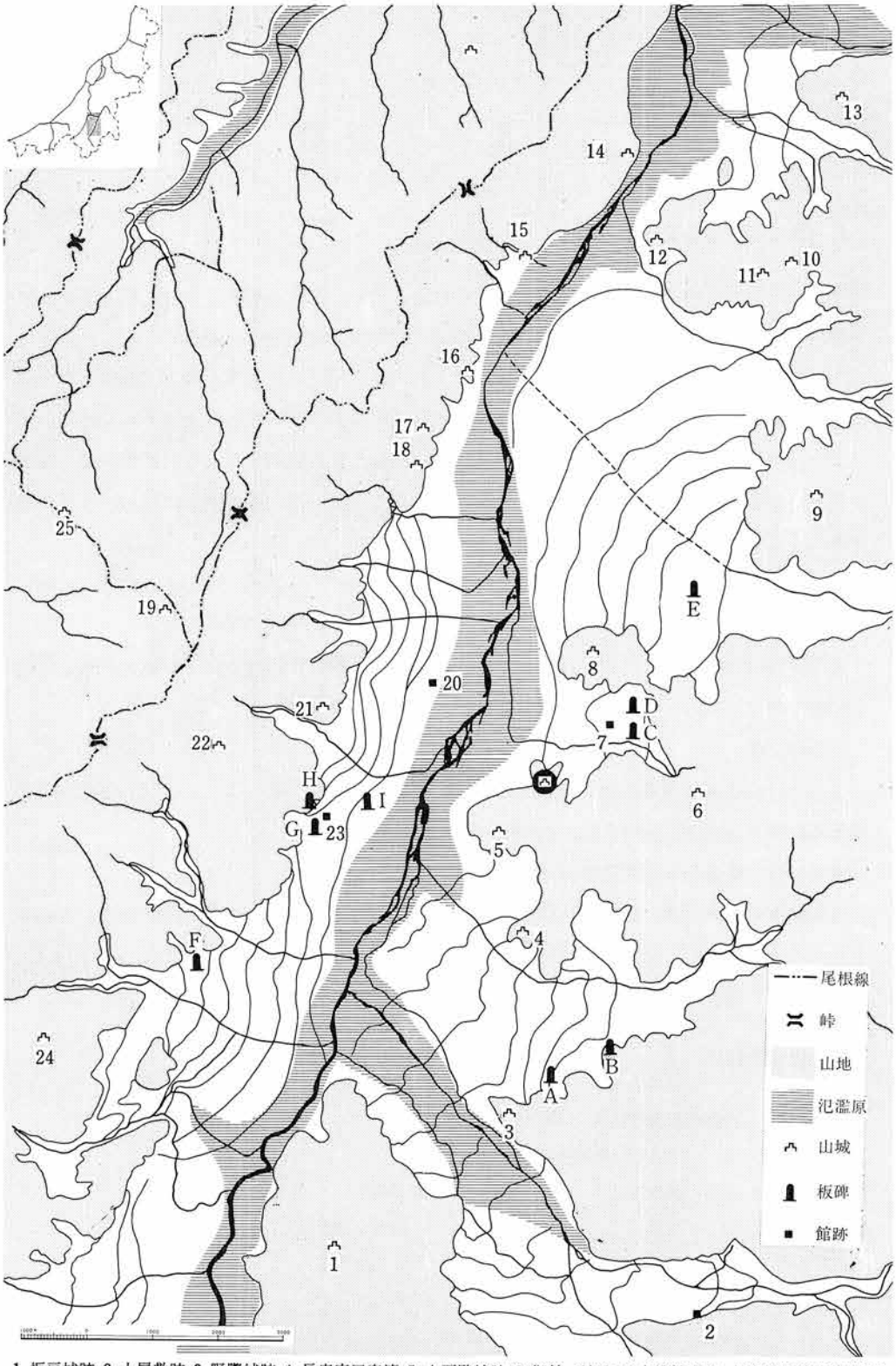
６月16日　空濠の調査にかかる。濠部分は土砂よりも木根や礫が多く予想以上に発掘に手間どる。セクションベルトとして尾根線に沿う南北方向を残す。

６月18日　昨日から作業員が入ったため，調査を二つのグループに分けることとした。一つは空濠部の図面作製，他の一つは山城全測図作製のための下刈り作業と遺構確認を実施する。

６月19日　調査期間のうち半分が雨天であったが空濠部の調査を終了する。

3. 調査の構成

主　　体	新潟県教育委員会	（教育長　久間　健二）
総　　括	南　義昌	（新潟県教育庁文化行政課長）
管　　理	石山　欣弥	（　〃　課長補佐）
調査指導	金子　拓男	（　〃　埋蔵文化財係長）
調査担当者	中島　栄一	（　〃　文化財主事）
調 査 員	品田　高志	（　〃　嘱託）
	細矢　菊治	（新潟県文化財保護指導委員）
庶　　務	近藤　信夫	（新潟県教育庁文化行政課副参事庶務係長）
	獅子山　隆	（　〃　主事）
協　　力	大和町教育委員会　株式会社福田組	



1.坂戸城跡 2.大屋敷跡 3.野際城跡 4.長森宮田空濠 5.六万騎城跡 6.御館ノ城跡 7.大崎館跡 8.大崎城跡 9.桐沢城跡 10.湯谷城跡 11.板木城跡 12.桑原城跡 13.千溝城跡 14.青島城跡 15.境川城跡 16.下山城跡 17.浦佐城跡 18.上山城跡 19.後山城跡 20.御館 21.椚山城跡 22.寺尾砦跡 23.黒治台屋敷跡 24.君帰城跡 25.山の鼻城跡
A.愛宕山板碑 B.妙音比丘尼板碑 C.龍谷寺板碑群 D.大崎院板碑 E.三ツ塚板碑 F 蟹沢板碑 G 寺尾観音堂板碑 H 阿弥陀堂板碑 I 宝蔵寺板碑 ⊗苗場山城

第22図 遺跡位置図

Ⅱ 遺跡の環境

1. 地理的環境（第22・23図）

魚野川は三国山脈を水源とし，南魚沼郡・北魚沼郡を貫流し，北魚沼郡川口町で信濃川に合流する延長約65kmの一級河川である。地形上，魚野川の左岸と右岸とでは相違がみられる。即ち，右岸地域は越後三山をはじめとする1,000m以上の山々が連なり，いわゆる越後山脈を形成している。これに対して右岸は500m前後が大部分で丘陵状の山地となっている。このため，左岸は小河川が多く，右岸は河川数は少ないが流路は左岸に比べ長くなっている。また扇状地が典型的に発達している地域でもある。

越後三山の一つである八海山（1,775m）は信仰の対象とされる霊峰である。八海山から西へ伸びる支丘に猿倉山（668m）があり，末端部は蝸牛の触角のように沖積面へ突出している。この触角状の尾根先端西側部分が，関越高速自動車道の土取り対象地域となった。当該地域には苗場山城の外部施設である空濠が存在しており，今回の調査対象とされたのである。

苗場山城は南北に伸びる尾根筋を利用して構築されており，尾根の東側，西側とも急斜面となっている。本城とみられる六万騎城は南へ約1kmの位置に，北東2kmには大崎城がそれぞれ所在する。また苗場山城からは北方向180度を眺望でき，西側の麓には水尾村落が在り，魚野川に500mと最も近接する地点でもある。

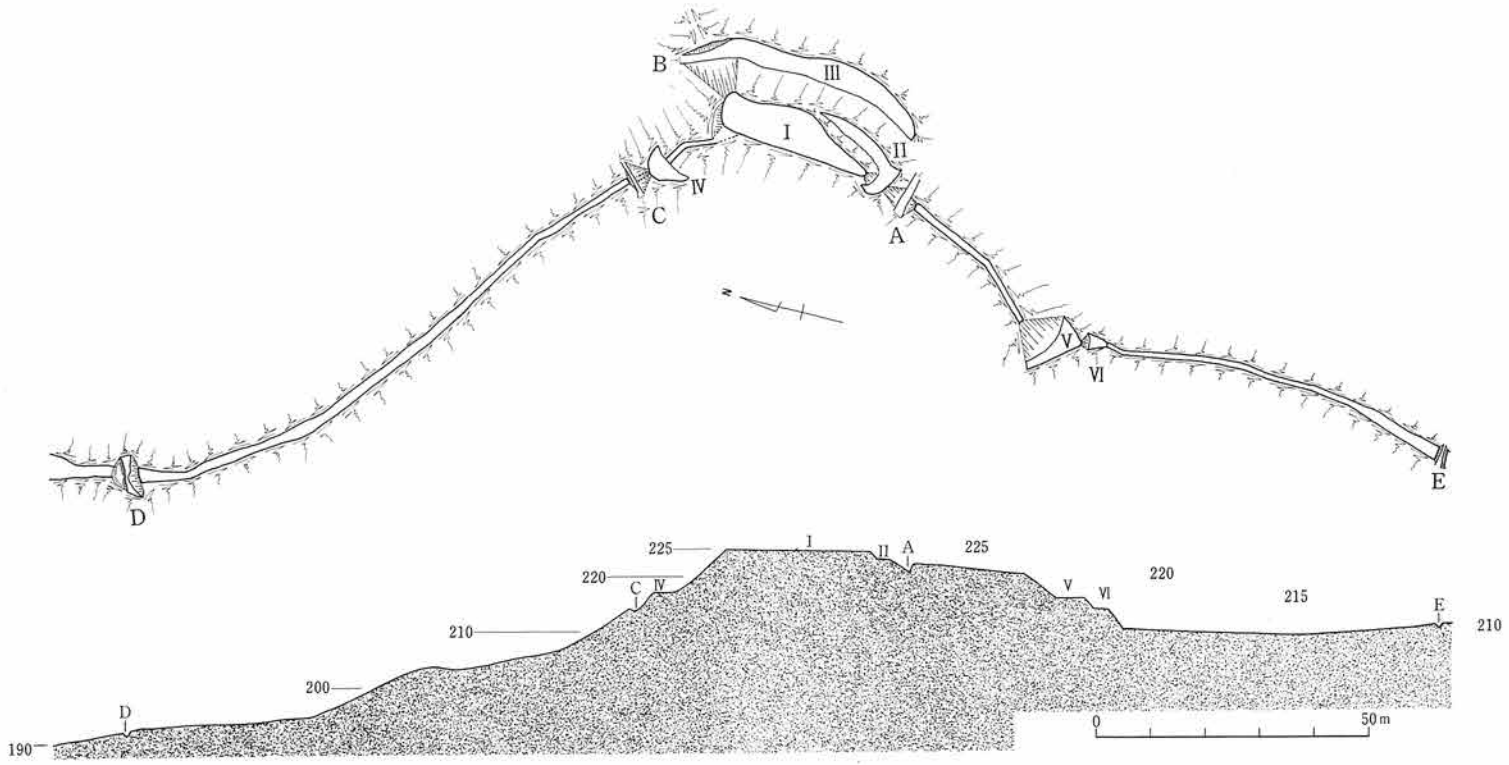
この周辺は先述したように扇状地が発達しているが，扇頂部の山裾部分には館や板碑の所在する古い集落が，扇央部は近世以降に開拓されたと思われる新田集落がみられる。山城は丘陵・山地の縁辺部に所在している。

2. 歴史的環境

魚沼盆地は越後と関東を結ぶ要路である三国越え・清水越えの重要な地域であった。その中核的位置を坂戸城が占めた。従って関東への道で魚沼盆地を通過するコースは全て坂戸城から眼下に入った。この魚沼の谷は坂戸城を中心に盆地の北端で狭隘化する地点に下倉城を配し，右岸には北から板木城，湯谷城，六万騎城，野際城，清水城，柄沢城，木六城と続く。一方左岸は浦佐城，櫛山城，野田城，君帰城，樺野沢城と続き，盆地内の関東街道要路は厳しい監視下にあったと言える。

魚沼地域は城氏が没落すると新田一族が支配を強め，南北朝時代の興亡を通して北朝方の上杉氏が優勢となり，越後国守護職の地位を得るようになる。その後，いわゆる戦国時代へ突入し，下剋上の様相がこの越後にも現出した。即ち，守護職上杉氏と守護代長尾氏との抗争がみられた。魚沼では守護代の長尾為景の一族である長尾房長が坂戸城主として大きな勢

第23図　遺跡周辺の地形図



第24図　苗場山城全測図

力を誇っていた。永正の乱（1507）では長尾為景は長尾房長の援助もあって，守護職である上杉房能を東頸城郡松之山で自害させ，関東管領上杉顕定を六日町の長森原で討ち取り，守護代長尾為景の実質的な越後支配へと踏み出していった。その後上田の合戦，享禄・天文の乱を経て長尾為景の越後支配が確立していくのである。

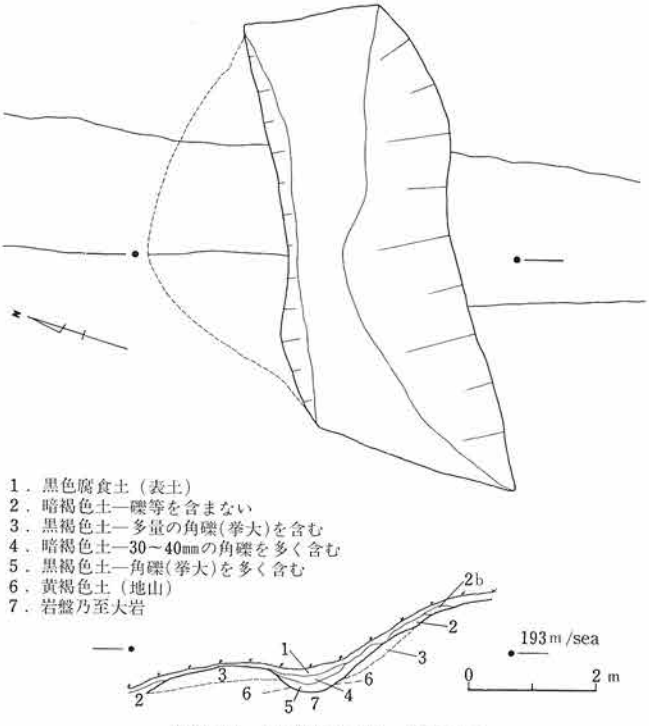
長森原の戦いは，六万騎城直下で繰り広げられ，当然，六万騎城の支城的機能を帯びていた苗場山城は，この戦いで重要な役割りを果したものと思われるが，文献等には苗場山城の動向は触れられていない。六万騎城は苗場山城と同じく猿倉山，堂平山から延びる一支脈であり，尾根伝いで苗場山城に連なっており，直線距離で約１㎞である。城郭は坂戸城と同型式で，東西500ｍ・南北500ｍの範囲に営まれ，本丸・二ノ丸・三ノ丸など20ヵ所以上の郭が存在する。坂戸城とは宇田沢川・三国川を挟んで対峠し，上田郷を一望できる。坂戸城北側の支城として野際城とともに重要な備えであったと考えられる。ただ六万騎城から死角となる大崎方面への備えと連絡の役目を担って苗場山城が築かれたものと思われる。

Ⅲ　調査の結果

1.　空濠について（第25図・図版20）

空濠は南北に伸びる尾根を切断して構築されていた。中心部（Ⅰ郭）より西へ約130ｍ離れ，尾根が平野に没しようとする標高193ｍに位置する。

空濠の尾根幅（東西）は基底面で約50㎝，尾根筋（南北）は約2.5ｍの薬研堀状を呈している。基盤層である岩盤を約10㎝掘り込み，尾根筋南の高い部分から，北の低い方に角礫を含む土砂を積み上げている。構築時には尾根筋南は基底面から1.5ｍの比高があり，北は盛り上げた土砂で土塁状の効果をあげていたもの



第25図　空濠(D)の平・断面図

と思われる。

断面の観察からすると，空濠構築時には底部の岩盤層に当ったため，それ以上に掘り下げることを止めたものと考えられる。しかし猿毛山が地質的には安山岩質凝灰角礫岩層であり，径２～３ｍを越える大岩を含むことから，基盤層と考えている面がこの大岩である可能性も考えられる。

2. 苗場山城について（第24図）

Ⅰ郭は苗場山城の中心郭をなすもので，平面は台形を呈し，東西８ｍ，南北28ｍ，面積約168㎡，標高は224ｍである。周辺では最も高く，「苗場山」の祠があり，このことから苗場山城と称するようになった。Ⅰ郭から東側２ｍ下に平面が三角形を呈したⅡ郭があり，東西３ｍ，南北19ｍ，面積57㎡である。Ⅱ郭の南側に接して，Ａ空濠が存在し，幅1.5ｍでⅡ郭との比高は2.5ｍである。Ⅲ郭はⅠ・Ⅱ郭の東側を帯状に半周する郭で東西４ｍ，南北40ｍ，面積80㎡で標高は219ｍである。Ⅲ郭の北にＢ空濠が存在し，幅２ｍ，Ⅰ郭との比高は4.5ｍである。Ⅳ郭はⅠ郭から西へ伸びる尾根筋上13ｍの地点で，尾根を削平している。平面は半円形を呈し東西４ｍ，南北８ｍ，面積25㎡で標高は217ｍである。Ⅳ郭から西の尾根筋は急斜面となり，３ｍ以上の落差を持つＣ空濠となっている。西への尾根道はＣ空濠とⅣ郭が最終防御拠点となったと思われる。Ｃ空濠から西へ115ｍで今回の調査対象となったＤ空濠が存在し，西の最前線となっている。

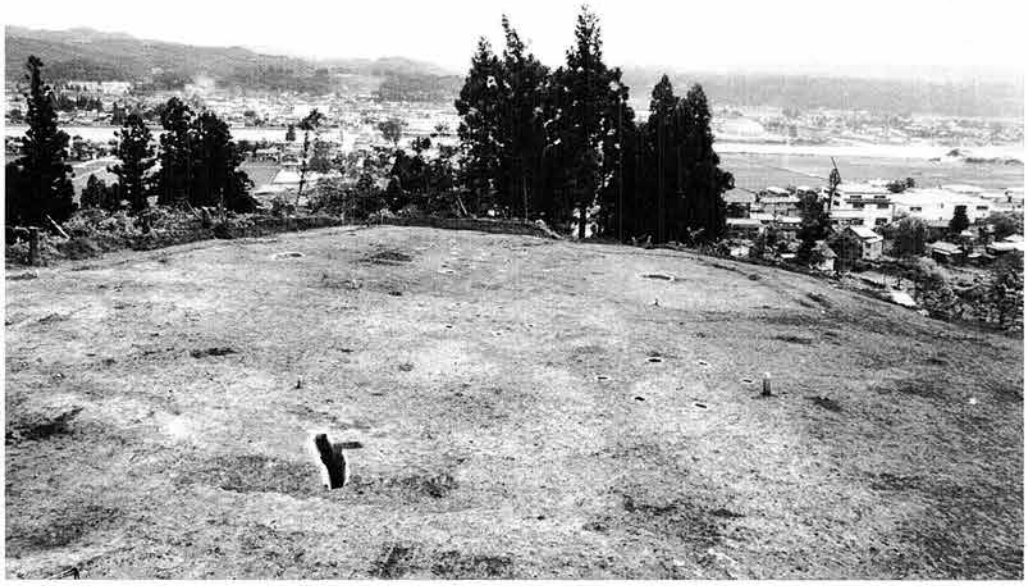
一方，南へはⅡ郭から45ｍでⅤ郭となる。Ⅴ郭は面積約16㎡，標高215ｍであり，その直下にはⅥ郭が存在する。Ⅵ郭は面積約５㎡でⅤ郭との比高差は２ｍである。Ⅵ郭から東へ65ｍでＥ空濠が在り，尾根道を切断している。

以上のように苗場山城は小規模ながら，南北に伸びる尾根に郭や空濠を巧みに配した中世山城の典型を示すものと思える。

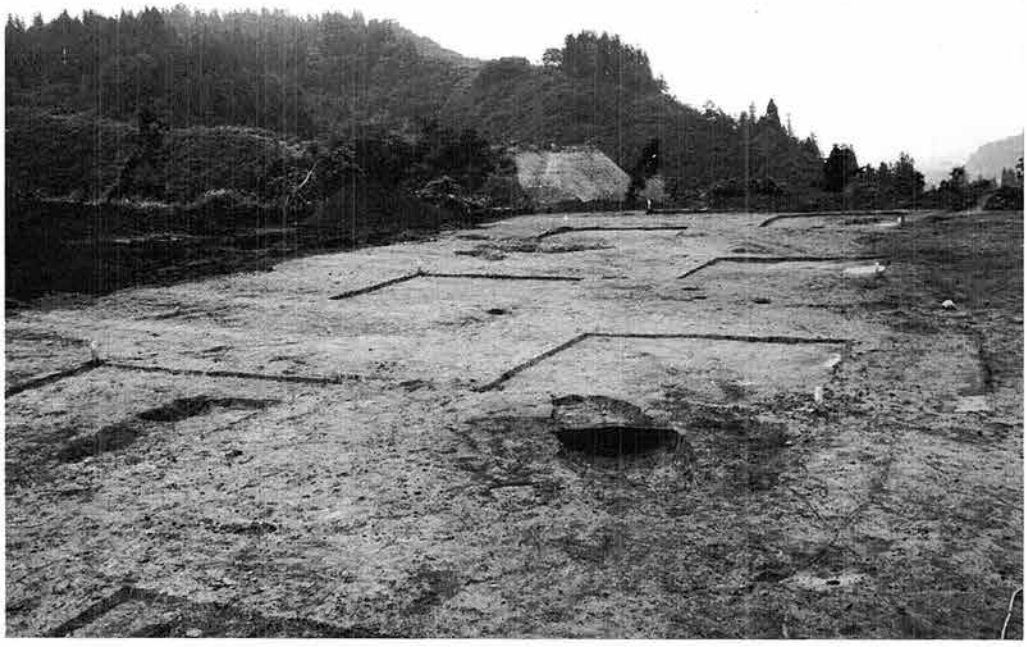
遺跡遠景

遺跡近景

図版 2

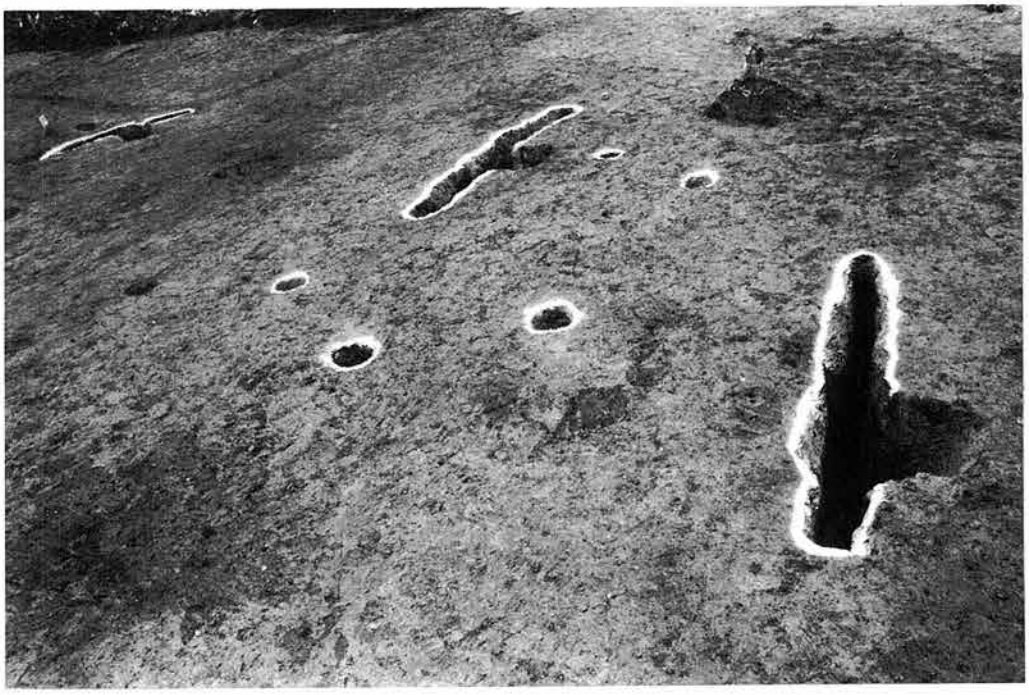


遺構完掘状況



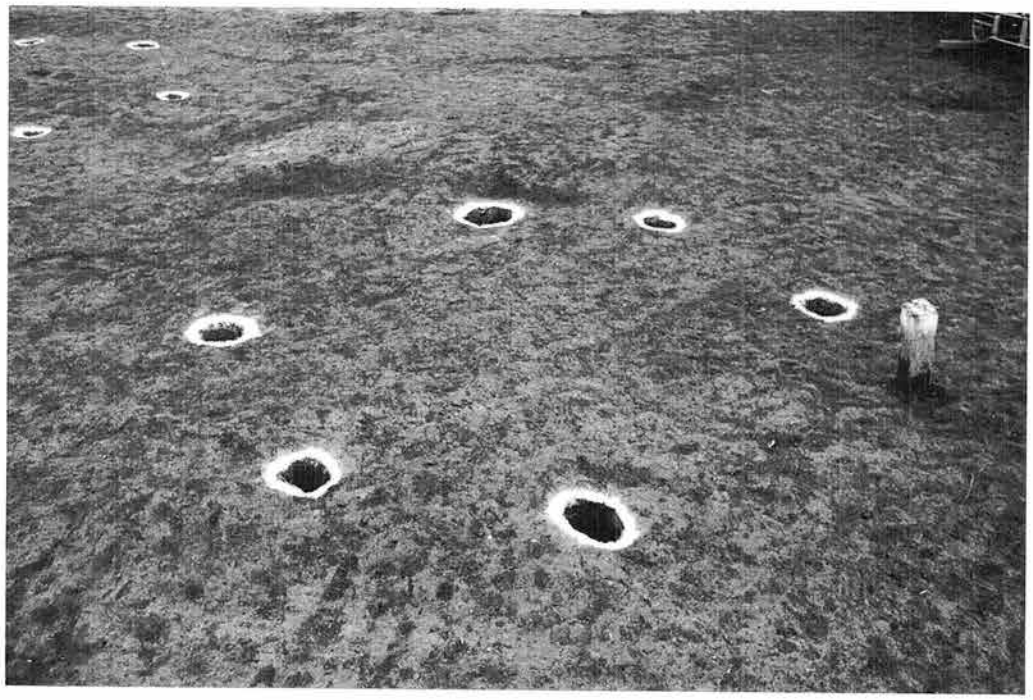
先土器時代遺物包含層試掘状況

1 号住居跡完掘状況

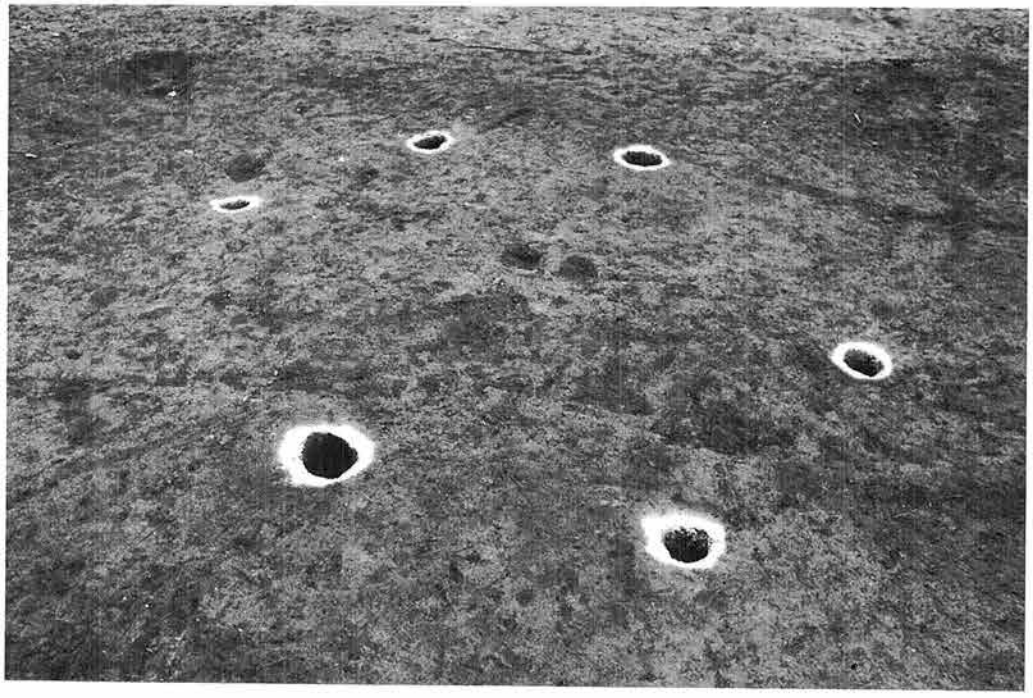


2 号住居跡及び第 2 ～ 4 号Ｖ字形溝状遺構完掘状況

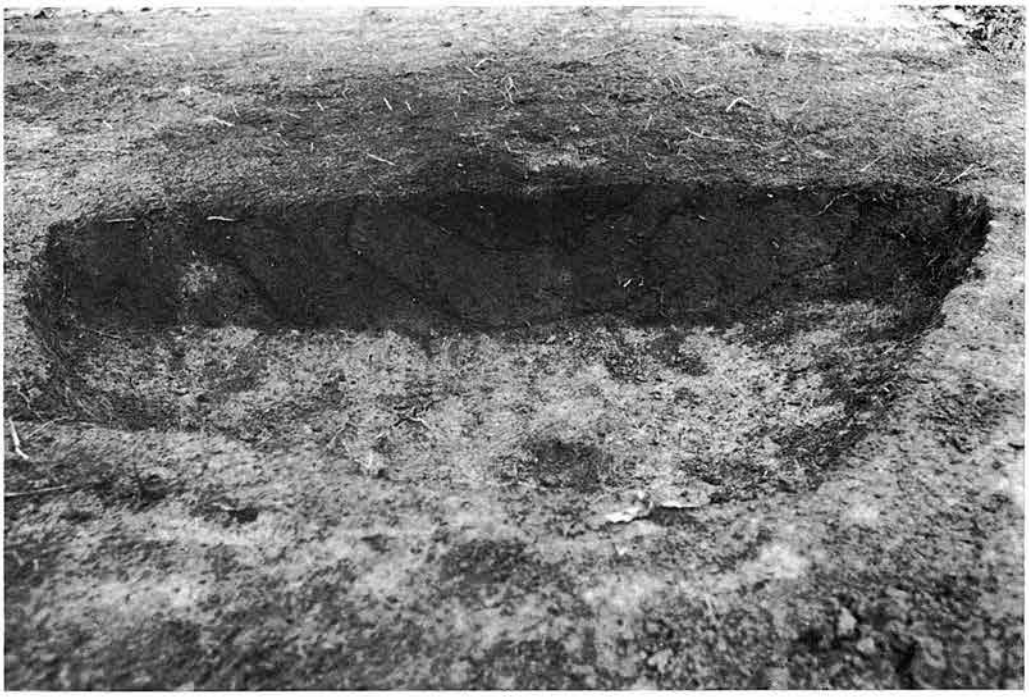
図版 4



3 号住居跡完掘状況

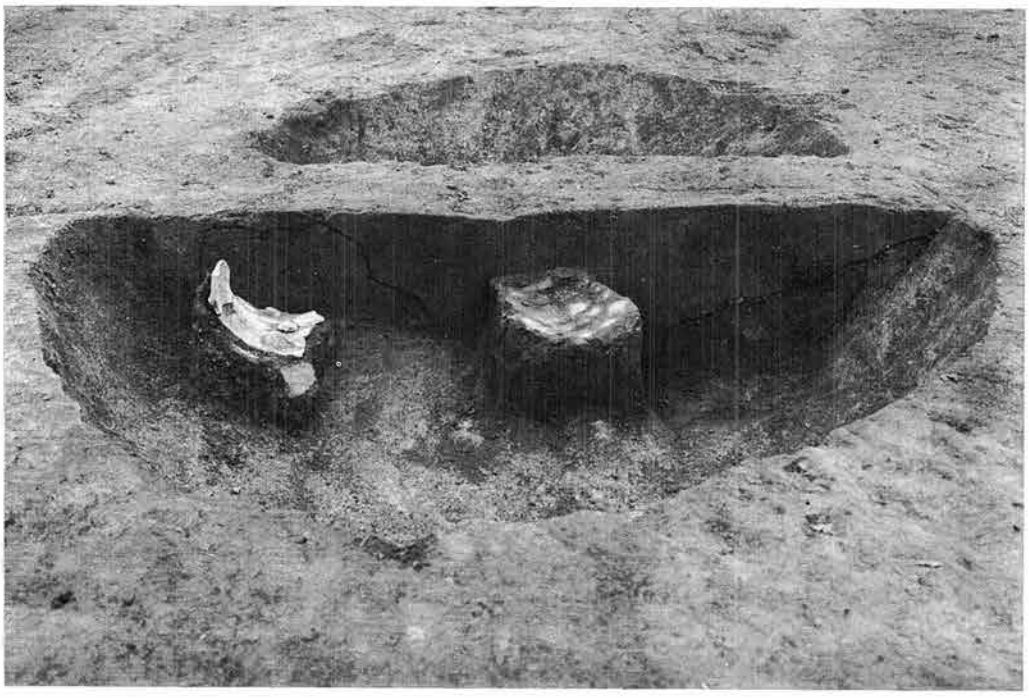


4 号住居跡完掘状況

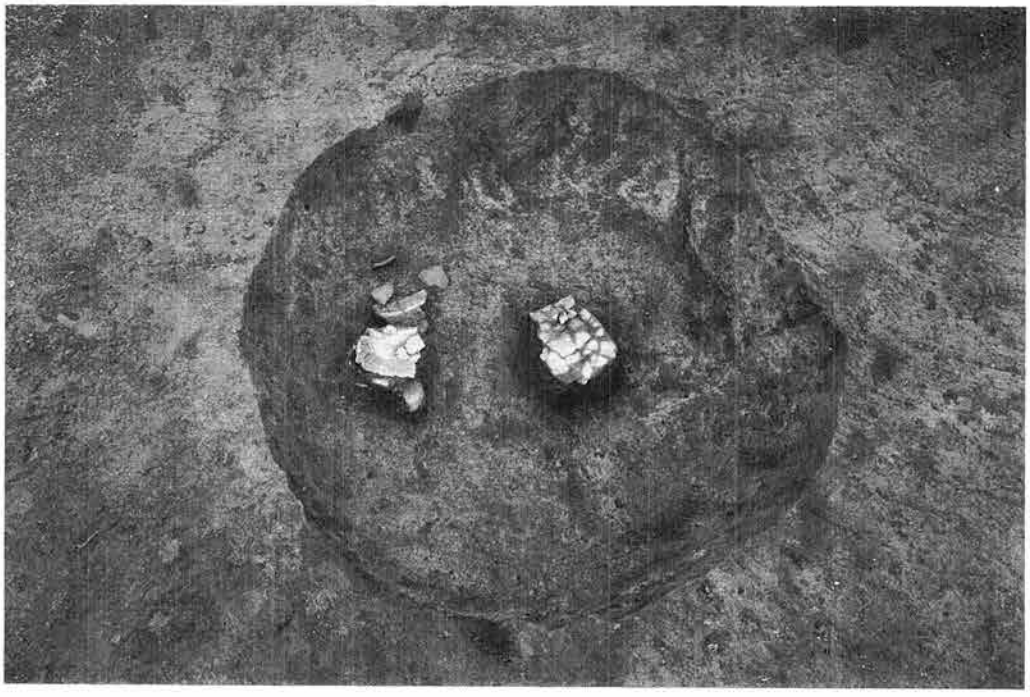


（上）１号土壙断面　（下）第１号Ｖ字形溝状遺構断面

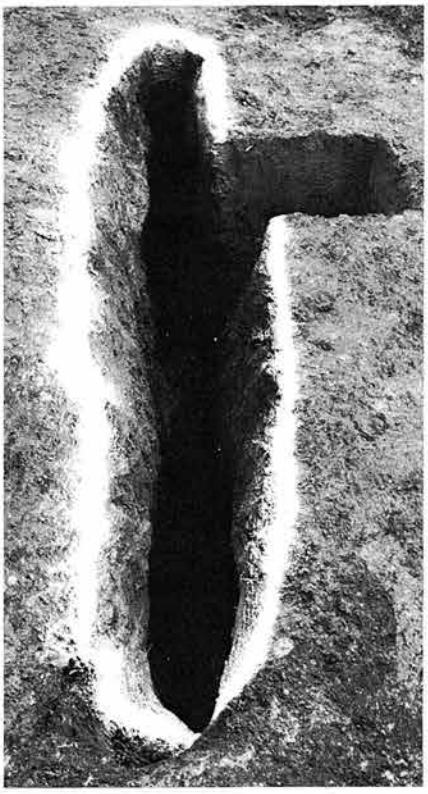
図版 6



第 2 号土壙断面

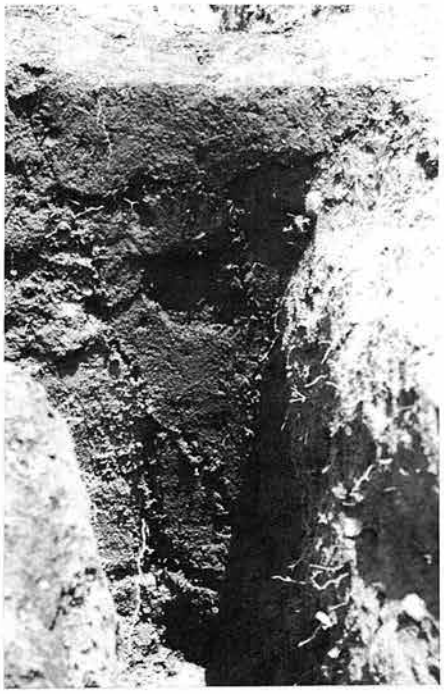


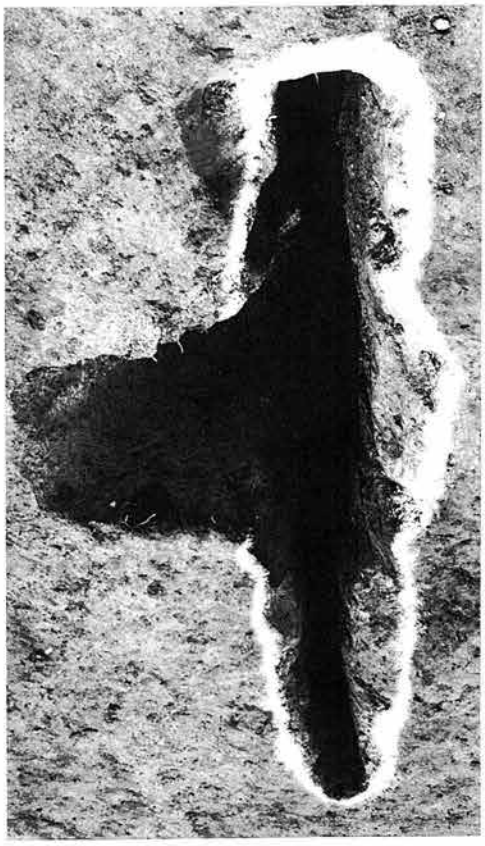
第 2 号土壙土器出土状況



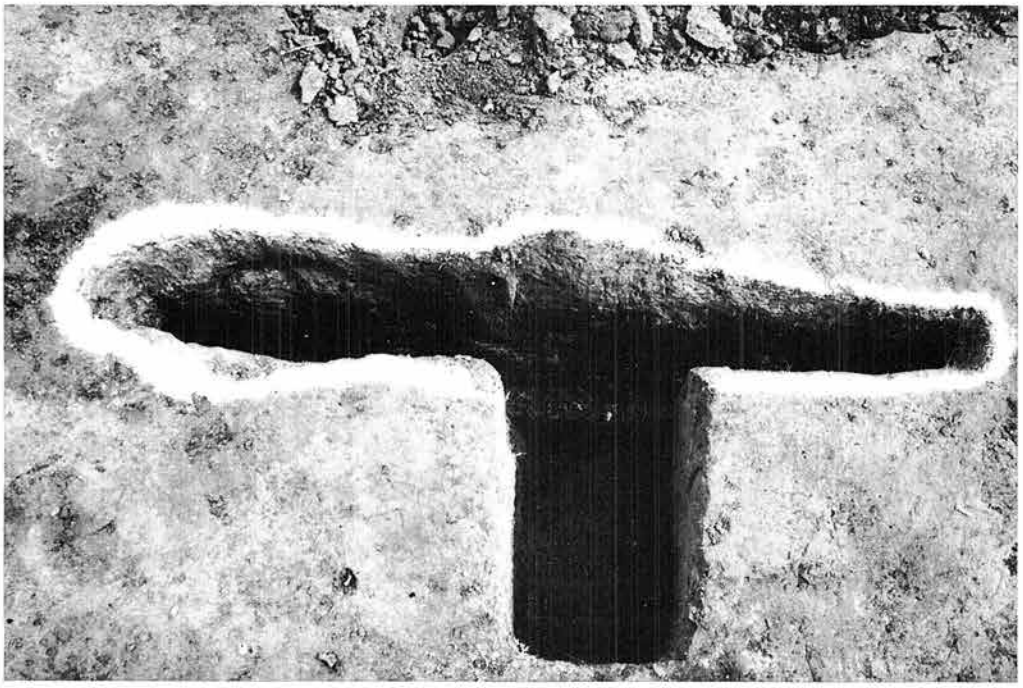
（上） 第 2 号Ｖ字形溝状遺構

（下） 第 3 号Ｖ字形溝状遺構

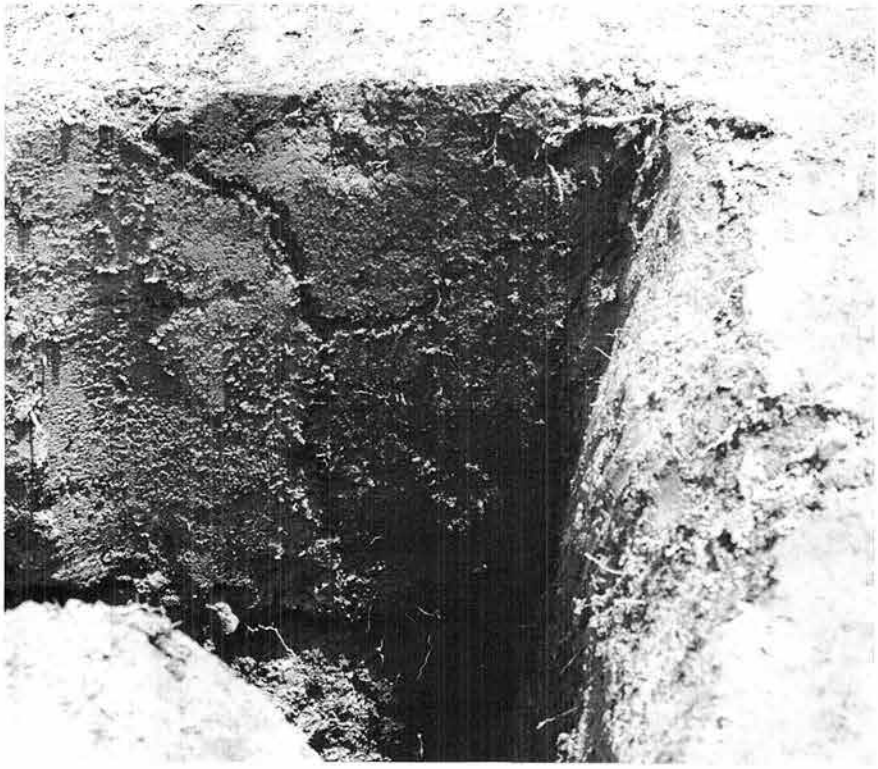


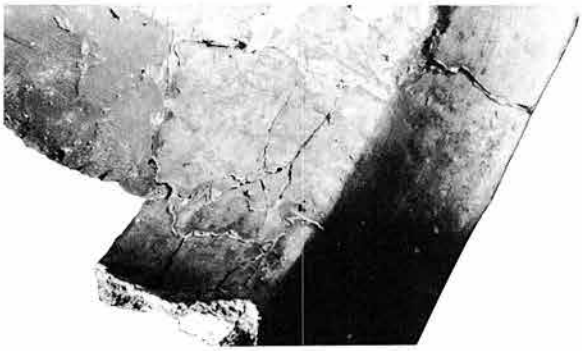


図版 8



（上）第 4 号Ｖ字形溝状遺構完掘状況　（下）第 4 号Ｖ字形溝状遺構断面





内面整形痕

口縁部文様帯

口縁部文様帯

縄文

突起接合部

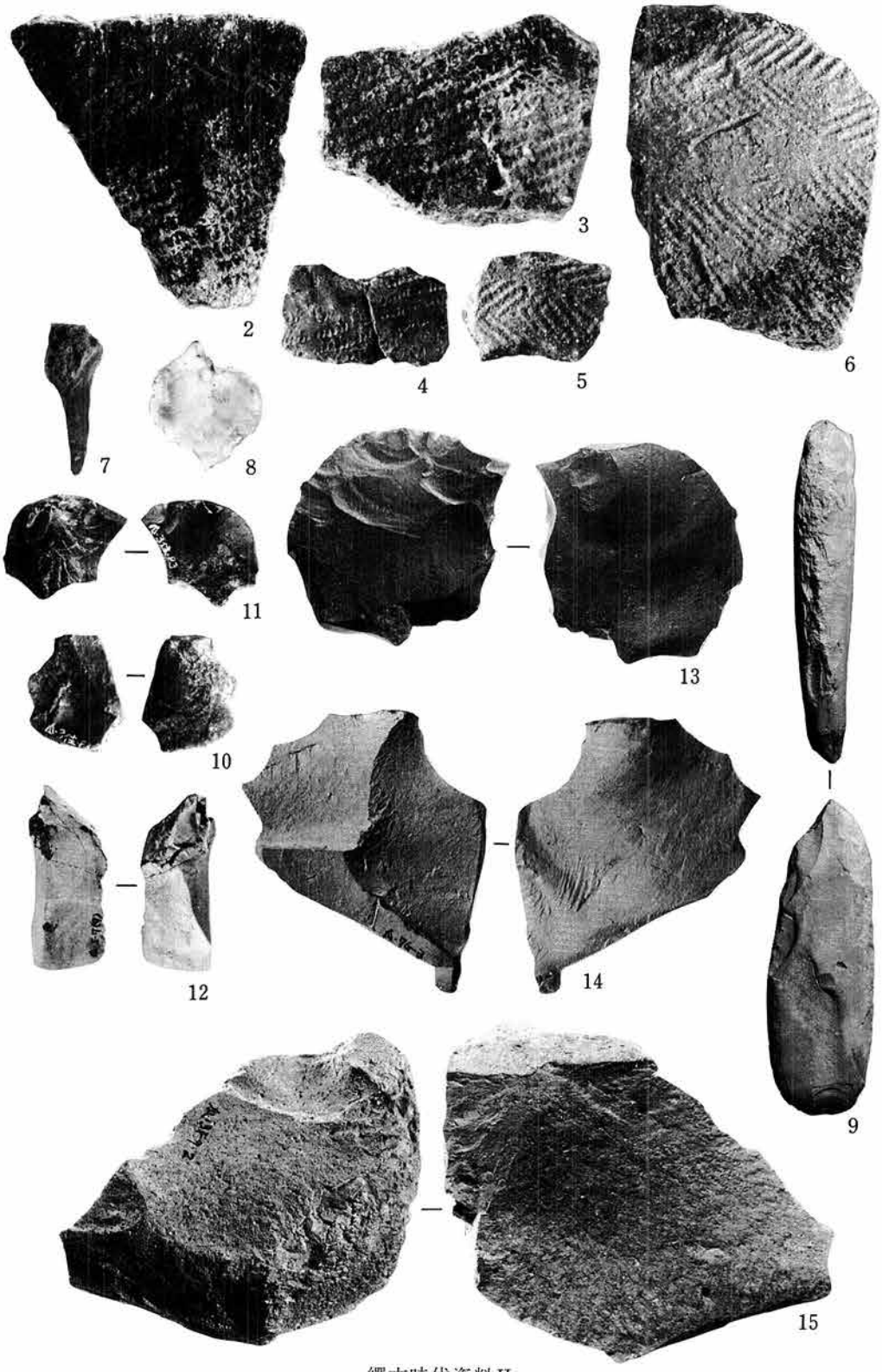
胴部下半内面整形痕

底部接合部

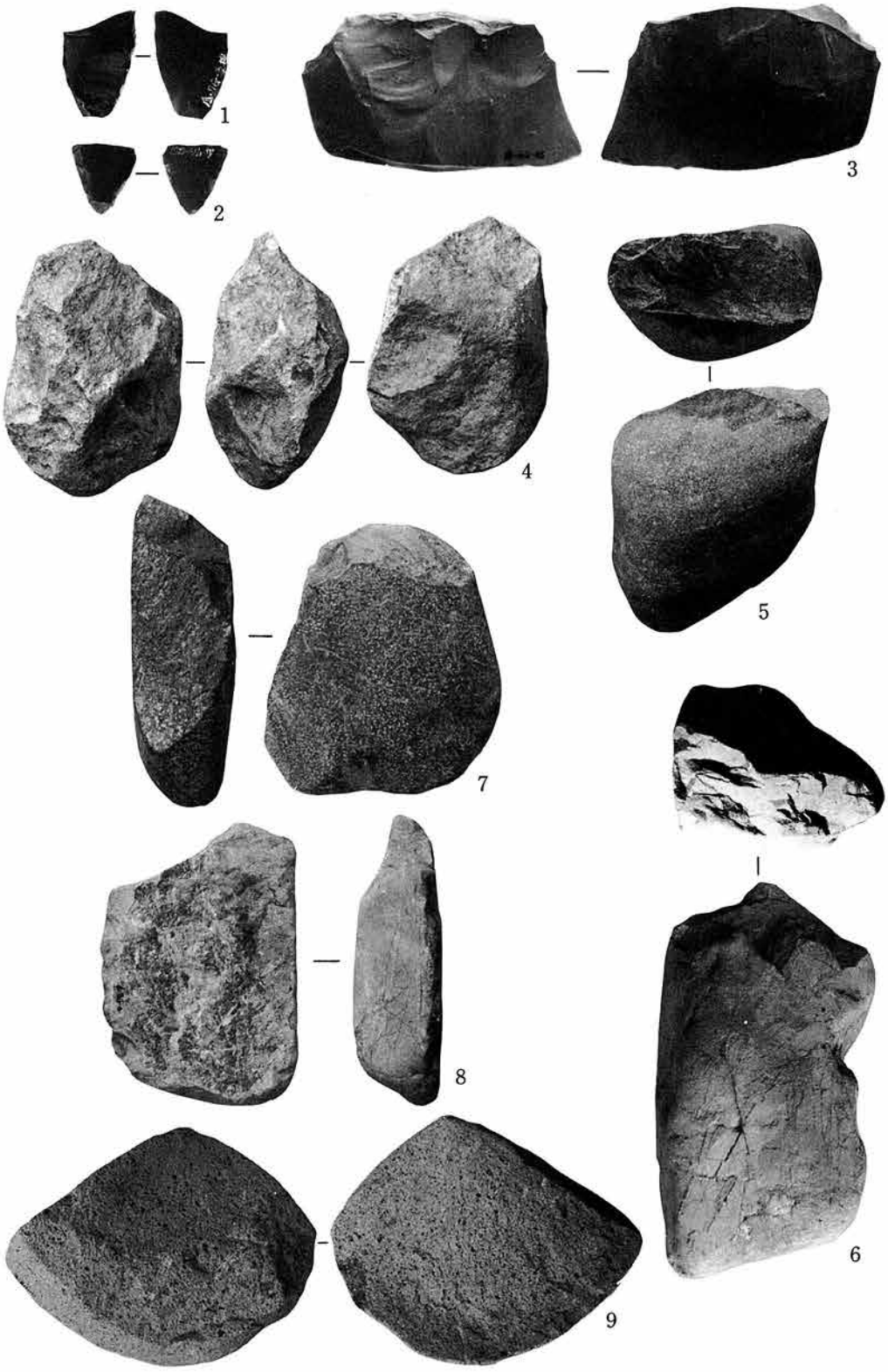
突起

縄文時代資料 I

図版10



縄文時代資料II



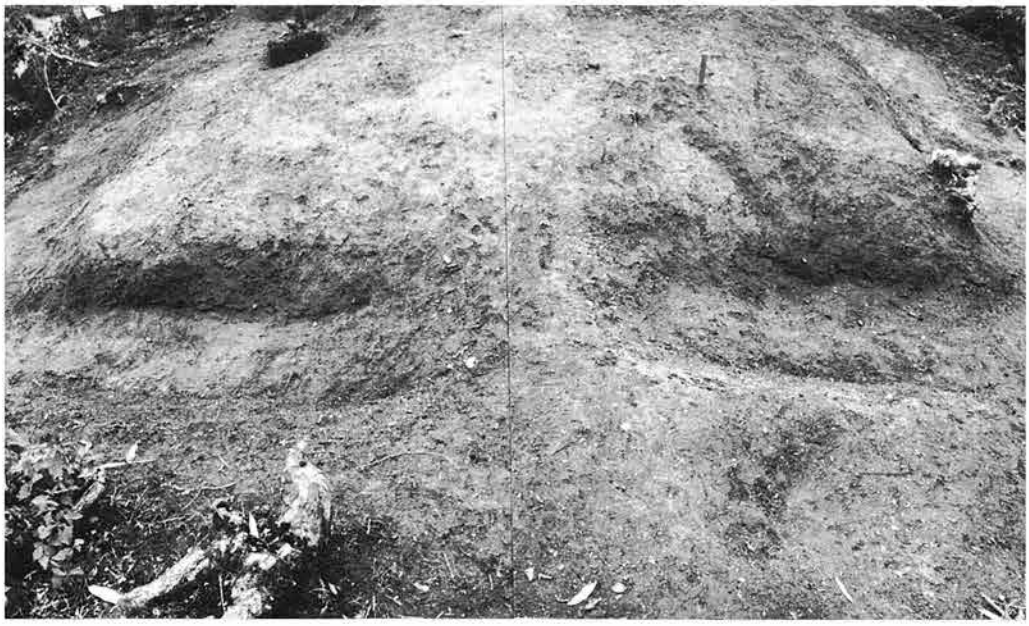
先土器時代資料

図版12

滝 沢 の 塚

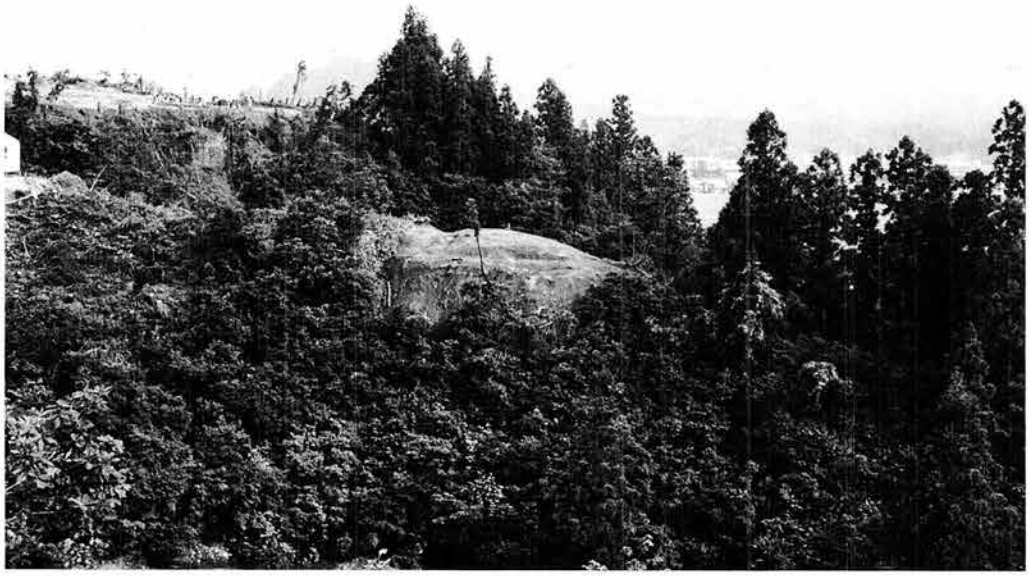
発掘前遠景（瓜ヶ沢遺跡から）

西 側 盛 土 状 況

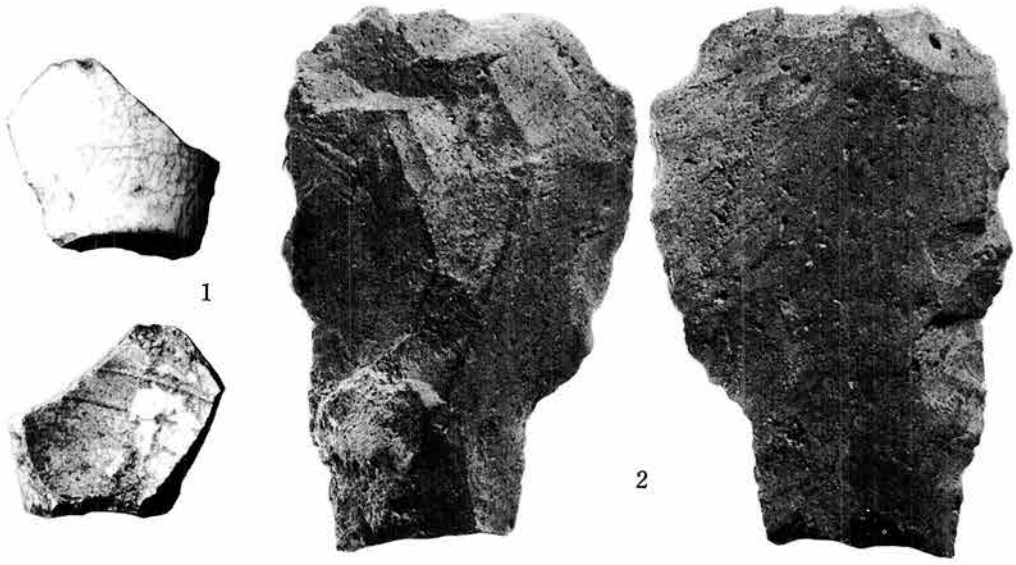


東側土橋状張り出し部

完 掘 近 影（瓜ヶ沢遺跡から）



完 掘 遠 景（権現平遺跡から）



出土遺物　1 陶磁器(½)　2 剥片(1/1)

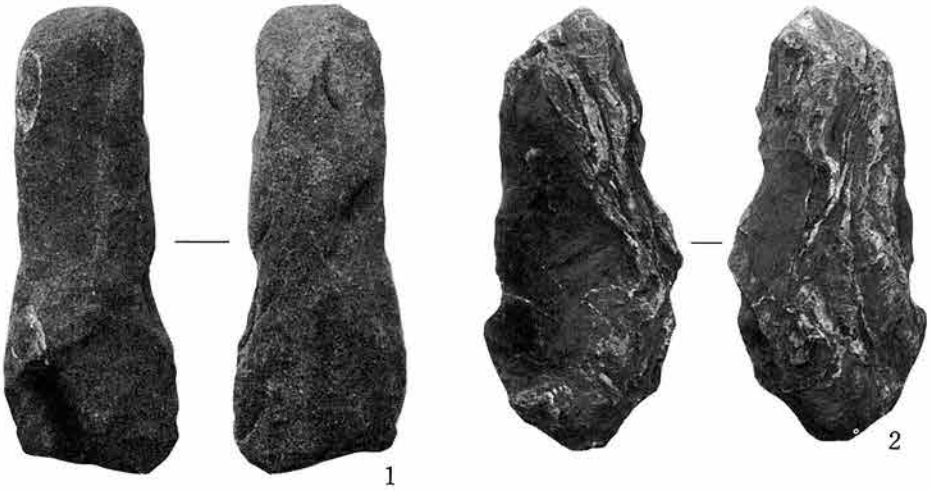
遺　跡　遠　景（東から）

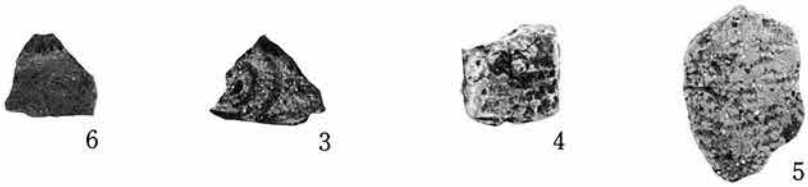
遺　跡　近　景（北から）

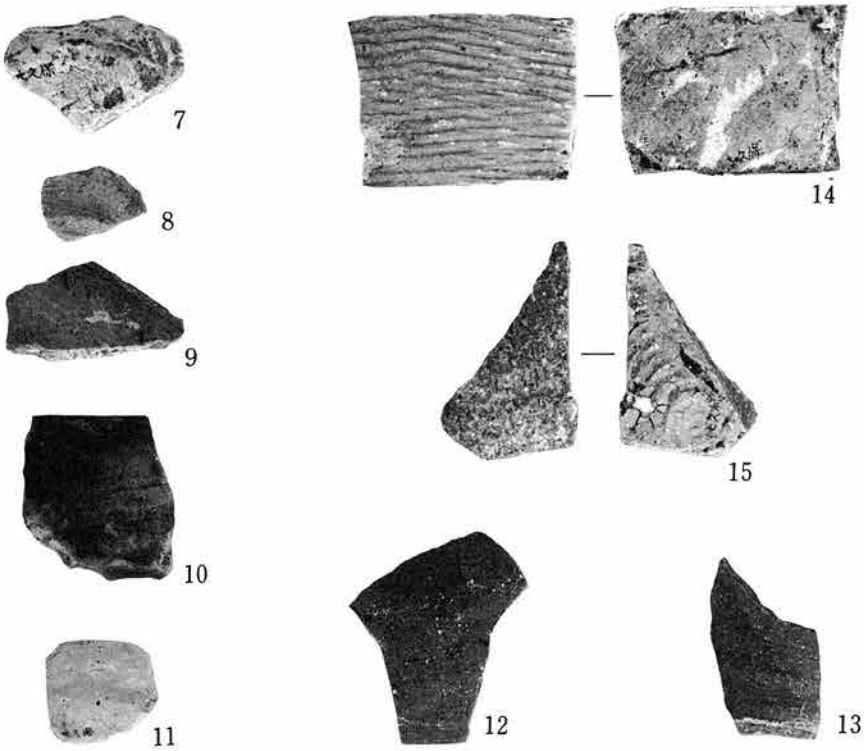
図版16

発掘スナップ

キャタピラ痕検出スナップ







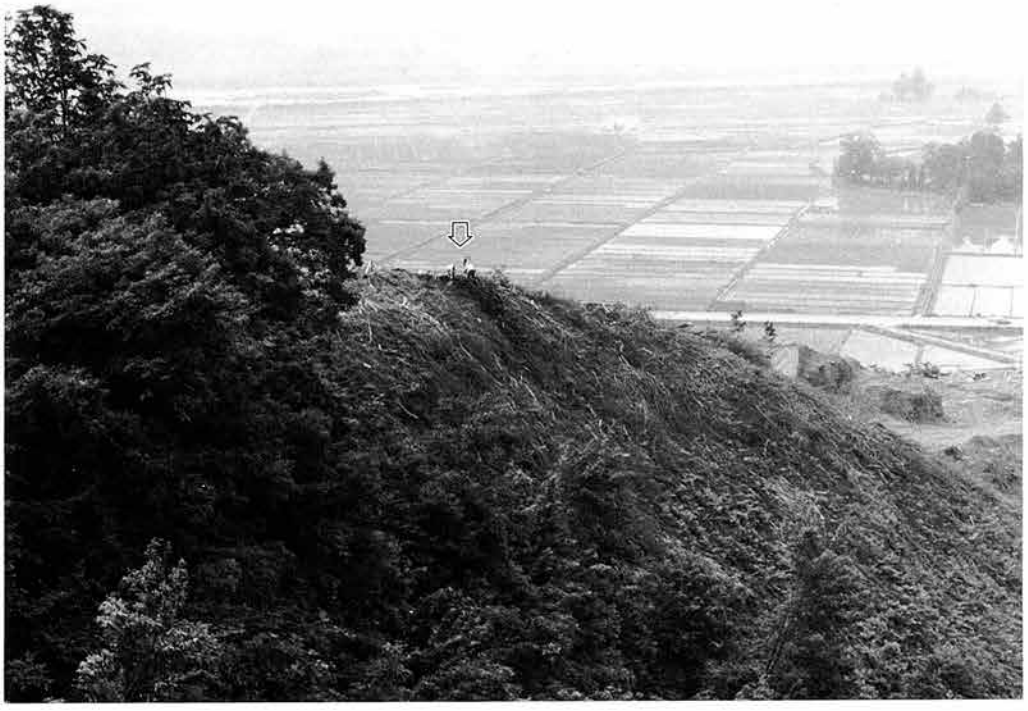
表面採集資料

苗場山城跡

山城調査地点から北方を望む

苗場山城を望む

空 濠 全 景



Ⅲの郭から調査地点を望む（↓印調査地点）

図版20

空　濠　断　面（発掘前）

空　濠　断　面（発掘後）

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第31
関越高速自動車道

埋蔵文化財発掘調査報告書

瓜ヶ沢遺跡
滝沢の塚
七久保遺跡
苗場山城跡

——1985——

昭和60年3月20日　印刷
昭和60年3月30日　発行

発行　新潟県教育委員会
印刷　長谷川印刷